

○第拾貳號 五月十四日 農商務卿連名

本年(二月)第五號ヲ以テ及布達候製茶共進會規則別冊ノ通之ヲ定ム
右布達候事

製茶共進會規則

第一章 總則

第一條 兵庫縣下神戸港ニ於テ第二回ノ製茶共進會開設ノ主意ハ去ル明治十二年横濱

ニ於テ第一回製茶共進會以來茶業上ニ現ハレタル改良進步ノ度ヲ比較シテ之カ優劣
ヲ定メ倍其業ヲ擴張セシムルコアリ

第二條 本會開設ノ日限ハ本年九月一日ヨリ十月廿日マテ五十日間トス

但本會事務所ハ八月一日ヨリ開キ其場所ハ追テ農商務卿ヨリ告示スヘシ

第三條 本會ノ出品ハ内國人ニシテ茶園三段歩以上ヲ栽培製造スルモノ若シクハ他人
ノ生業ヲ買入レ壹千五百斤以上ヲ製スルモノニアラサレハ出品ヲ許サス
但茶業ニ就キ著ルシキ功勞發明等アルモノハ以上ノ反別及ヒ製額ニ充タスト雖モ

其理由ヲ詳記シ出品スルヲ得

第四條 本年ノ製茶ニアラサレハ出品ヲ許サス

但參考ノ爲メ前年ノ製品ヲ添附スルハ妨ケナシト雖モ審査ヲ加ヘス

第五條 本會ニ供スル爲メ故ラニ精良ノ品ヲ製造シテ出品スルヲ得ス若シ詐偽ノ所爲
アルモノハ其出品ヲ斥ケ陳列ヲ許サス

但出品ハ一品毎ニ其年ノ製額ヲ申告書ニ記載スルハ勿論時宜ニヨリ其實上證書ヲ
出サシムルコトアルヘシ

第六條 會社ノ名義ヲ以テ出品スルモノハ別ニ一己ノ製品ヲ出スヲ許サス但金員ノミ
ヲ以テ入社スルモノハ此限ニアラス

第七條 各自ノ發明ニ係ル器械ノ雛形圖式及著述書等ヲ出品スルモノハ別ニ參考室ヲ
設ケ陳列セシムヘシ

第八條 褒賞ハ本會ノ目的ニ適セル優等ノ出品若シクハ茶業ニ就キ發明功勞ノ著ルシ
キモノニ與フ又其功勞アル故人ハ之ヲ追賞スルコトアルヘシ

但出品主ニ非ルモ製茶職工ニシテ特ニ其技ニ熟達スル者及ヒ出品主ヲ助ケテ特殊ノ功域アルモノ又該商業有功ノモノニハ相當ノ賞ヲ與フルコトアルヘシ

第九條 褒賞等級左ノ如シ

特別名譽賞

一等賞 二等賞 三等賞 四等賞 五等賞 六等賞 七等賞

第十條 本會ハ壹人又ハ一社ニテ四五品ヲ出スモ妨ケナント雖モ褒賞ハ其中ノ高等品ニ限リテ附與スヘシ

第十一條 出品者ハ出品目錄壹通申告書貳通ヲ作り所轄郡區役所ノ與書ヲ受ケ管轄廳ニ差出シ管轄廳ニ於テハ豫テ委員ヲ設ケ之ヲ調査シ其誤謬ナキヲ確認セシ後出品目錄ハ本年七月三十一日迄ニ兵庫縣廳ニ郵送シ申告書ハ八月十五日迄ニ直ニ本會事務所ニ差出ス可シ(但本條ノ期限ヲ過クルトキハ出品スルヲ許サス)

第十二條 出品者ハ勿論職工及ヒ商人ト雖モ平常茶業ニ功勞アリテ其地方ノ模範トナルヘキモノハ地方廳ニ於テ詳細其履歷ヲ取調親展書ヲ以テ申告書ト共ニ本會事務所

ニ報告スヘシ

第十三條 出品往返ノ運送費出品主ノ旅費及ヒ飾附人夫等ノ費用ハ總テ自辨タルヘシ場内整頓ニ要スル陳列臺其他一切ノ費用ハ官費タルヘシ

第十四條 出品ハ本會委員ニ於テ可成保護スヘシト雖モ盜火難及ヒ天災等ノ如キ期ス可カラサル場合ヨリ生スル損害ハ總テ出品主ノ損失タルヘシ

第十五條 出品ハ一種ニ就キ壹斤乃至貳斤ヲ限リトス若シ參考ノ爲メ各自ノ商票ヲ表記シ箱詰ノマ、出品スルハ妨ナシト雖モ五拾斤ヲ超過スヘカラス現品ハ八月五日ヨリ全十五日迄ニ兵庫縣下神戸港本會出品委託引受所ニ向ケ送致スヘシ

但審査用トシテ同品各半斤ツ、ブリツキ罐或ハ箱等充分損害ヲ防クニ足ルヘキ器ニ入レ必ス送致スヘシ

第十六條 場内取締ハ本會掛員ノ負擔スル處ナルヲ以テ出品人其他場内ニ入ルモノハ總テ同員ノ指揮ニ違背スルヲ得ス

第十七條 出品主ノ都合ニヨリ代理人ヲ出シ又ハ甲乙聯合シテ總代人ヲ出スモ妨ケナ

シト雖モ可成的該品ノ解説ヲナシ得ルモノヲ撰フヘシ

第十八條 會中ニ於テ出品賣買ノ約定ヲナスハ勝手タルヘシ

第十九條 褒賞授與式ハ十月七日ヲ以テ施行スヘシ

第二十條 褒賞授與式後ニ於テ製茶集談會ヲ開クヘシ

但期日會場及會議手續問題等ハ追テ農商務卿ヨリ告示スヘシ

第二十一條 審査長審査員ハ總テ官撰タルヘシ

但審査員ハ場合ニヨリ出品人ヨリ撰舉スルコトアルヘシ

第二十二條 審査員ハ其出品ヲ査閲シ每其優劣ヲ審ニシ之カ附點表ヲ作審査長ハ褒賞ノ等級ヲ擬按シ之ヲ本會幹事ニ出シ幹事ハ之ヲ議判シテ農商務卿ノ裁定ヲ乞フヘシ

第二十三條 審査ハ掛員ノ考按多數ニ由テ其優劣ヲ決スルヲ例トス若シ其考按同數ナルトキハ審査長之ヲ決ス可シ又既コ多數コ決シタルモノト雖モ幹事其當ヲ得スト認ムルトキハ或ハ之ヲ再議セシムルコトアルヘシ

第二十四條 審査員ニ撰ハレタルモノ、出品ハ本人其審査コ與カルコトヲ得ス

第二章 會場ノ部

第二十五條 開會中ハ公衆ノ來觀ヲ許ス

但會場ノ都合ニヨリ觀者ノ人員ヲ限リ又ハ臨時來觀ヲ止ムルコトアル可シ

第二十六條 觀者場内ニ入ルトキハ一人毎コ入場券一枚ヲ持參シ門衛ニ交付シ得ル

但五歳未満ノ小兒ハ場入券ヲ要セス

第二十七條 入場券ハ一枚金壹錢ト定メ場外適宜ノ場ニ於テ賣渡サシムヘシ

第二十八條 出品主又ハ代理人ハ別コ門鑑一枚ヲ渡シ置クヲ以テ入場ノ際之ヲ門衛ニ示スヘシ

但他人ニ貸與スルヲ許サス若シ紛失スルトキハ其事由ヲ詳記シテ更ニ受取方申出可シ

第二十九條 入場券ヲ持參スト雖モ狂人醉客ノ如キ他ノ妨害者ト認ムルトキハ入場ヲ

許サス或ハ會場ヨリ立去ラシム可シ

第三十條 手荷物等ヲ提携シ又ハ獸類ヲ牽キテ入場スルヲ許サス

第三十一條 看護人ノ承諾ヲ受ケスレテ擅ニ物品ニ觸ル、ヲ許サス

第三十二條 場内ニ於テ吹煙ヲ禁ス

第三十三條 列品賣買約定ヲ爲スモノハ適宜ノ証書ヲ取換セ約定濟ノ印ヲ付ケ置キ閉場後ニ非サレハ他ニ搬出スレテ許サス

第三章 出品者心得

第三十四條 出品ノ遞送ハ左ノ手續キニ準據スヘシ

第一 出品ハ途中損傷ノ憂ナキヤウ堅固ニ荷造ヲナシ左ノ送狀ヲ添ヘ本會出品委託引受所ニ向ケテ郵送シ出品主又ハ代理人等出頭ノ上之ヲ受取り陳列方ヲナスヘシ但出品運送實ハ到着迄ノ分悉皆仕拂濟ノ上輸送スヘシ決テ先拂等ノ取計ヲナスヘカラス

送り狀ノ事

一何茶

何斤

附審査用

壹(罐箱)

右ハ共進會荷物書面ノ通り差送り候條到着ノ御御預リ置拙者(或ハ代理人何誰)申出次第御渡シ有之度候也

但神戸港共進會事務所迄ノ運賃拂濟

代理人印影

本人出張セズ代理人ヨリ荷物渡シ方ヲ該會ニ申立タルトキ照會ノ爲メ右ノ書式ノ通り代理人ノ印ヲ捺シ置クヘシ

何府 何郡 何町 何番地
何縣 何區 何村 何番地
年月日 何ノ誰印

神戸港

製茶共進會委託引受所御中

第二 出品主又ハ其代理人品物ヲ携帶シテ出張スルモノハ本會事務所ニ申立テ其指揮ヲ受ケ陳列方ヲナスヘシ

第三 出品者便利ノ爲メ本會事務所内ニ出品委託引受所ヲ設ケ都テ出品ノ取扱ヲナサシムヘシ

但出品委託引受所ハ追テ本會ヨリ報告スヘシ

第三十五條 委託引受所ニ於テ出品到着スルハ包裝ノ儘預リ置出品人或ハ代理人申出次第之ヲ引渡ス可シ若シ運送中ニ損傷ノ兆外包ノ上ニ顯ハレタルモノハ運送受負者ハ戻シ置シ可シト雖モ時宜ニヨリ荷造ヲ開放シ物品ノ保護ヲナサシムルコトアル可シ

第三十六條 出品ノ陳列ヲナスハ出品人或ハ代理人ノ擔當タルヘキコ付遅クモ開場五六日前迄ニ神戸ヘ參着シ該會委員ヘ申出テ指揮ヲ受ク可シ

第三十七條 出品ノ陳列ニ用フ可キ棚檯及容器ハ本會ニ於テ之ヲ設ケ置シ可シ尤出品人自費ヲ以テ別ニ備置等ヲ裝置セントスルモノハ其旨ヲ前以テ本會事務所ヘ申出裝置スヘキ場所ノ許可ヲ受クヘシ

第三十八條 陳列品ハ本會ニ於一定ノ票札ヲ製シ其品名及出品人國所姓名ヲ記スヘシ出品主ノ商票(繪模様家名ナトノ印)原價賣品非賣品等ノ札ハ各自ニ製造添附スヘシ

第三十九條 出品ニ付キ從前内外博覽會又ハ共進會及ヒ他ノ事由ニテ褒賞ヲ得タルモノハ褒狀ノ寫シ或ハ賞牌ノ模型又ハ圖ヲ附ヘシ

第四十條 閉會后十日限り出品主又ハ代理人總代人ハ其品物ヲ場外ニ搬出スヘシ
「印」朱發

出品	品名	產地	斤目
右御定メ期日迄無相違出品可致候也	「內國用何製茶 茶銘何々」	「何國郡町村字」	「何斤」
	「輸出向何製茶 茶銘何々」	「何々畑」	「何斤」
			「何斤」
明治年月日	何府下何郡何村身分	苗字	名(印)
製茶共進會事務所御中			
前書之通相違無之候也	何府何郡何町區長或ハ 何縣何區何村 戶長	苗字	名(印)

但出品委託引受所ハ追テ本會ヨリ報告スヘシ

第三十五條 委託引受所ニ於テ出品到着スルハ包裝ノ儘預リ置出品人或ハ代理人申出次第之ヲ引渡ス可シ若シ運送中ニ損傷ノ兆外包ノ上ニ顯ハレタルモノハ運送受負者へ戻シ置ク可シト雖モ時宜ヨリ荷造ヲ開放シ物品ノ保護ヲナサシムルコト可シ

第三十六條 出品ノ陳列ヲナスハ出品人或ハ代理人ノ擔當スルヘキコト付運クトモ開場五六日前迄ニ神戸へ參着シ該會委員へ申出テ指揮ヲ受ク可シ

第三十七條 出品ノ陳列ニ用フ可キ棚櫥及容器ハ本會ニ於テ之ヲ設ケ置ク可シ尤出品人自費ヲ以テ別ニ飾櫥等ヲ裝置セントスルモノハ其旨ヲ前以テ本會事務所へ申出裝置スヘキ場所ノ許可ヲ受クヘシ

第三十八條 陳列品ハ本會ニ於一定ノ票札ヲ製シ其品名及出品人國所姓名ヲ記スヘシ出品主ノ商票(繪模様家名ナト)ノ印(原價賣品非賣品等)札ハ各自ニ製造添附スヘシ
第三十九條 出品ニ付キ從前内外博覽會又ハ共進會及ヒ他ノ事由コト褒賞ヲ得タルモノハ褒狀ノ寫シ或ハ賞牌ノ模型又ハ圖ヲ附ヘシ

第四十條 閉會后十日限り出品主又ハ代理人總代人ハ其品物ヲ場外ニ搬出スヘシ

「印」朱發

出品	品名	產地	斤目
右御定メ期日迄無相違出品可致候也	「內國用 何製茶 茶銘何々」	「何國郡町村字」	「何斤」
	「輸出向 何製茶 茶銘何々」	「何々畑」	「何斤」
			「何斤」
明治年月日	何府下何郡何町何村身分		
製茶共進會事務所御中	苗字名(印)		
前書之通相違無之候也	何府何郡何町何村區長或ハ何縣何區何村戶長		
	苗字名(印)		

同
「紅茶」
「烏龍茶」

萎凋 日光ニ晒シ或ハ火熱ヲ用ヒ何々ヲ適度トス

蒸炒 何々ノ釜或ハ鍋ヲ用ヒ何々ヲ適度トス

揉捻 何々ノ臺コヲ手ヲ用ヒ何々ヲ足ヲ用ヒ一日壹人何程ヲ揉ム等

蒸 何々ノ器ニモリ日温ヲ用ヒ或ハ温室ヲ用ヒル等

烘 何々ノ焙爐ヲ用ヒ何程ノ火度ヲ用ヒル等

篩分 何番ヲ用ヒ篩切ヲ何々何番ヲ以テ折碎シ何番ヲ以テ葉摘シ何種コ分ツ

製造製計算

同代價総額	同	同	同	同
生葉ノ量総額	「何萬何千貫目	同	同	同
備目	年度	十六年	十五年	十四年
		十三年		

同壹番芽	何千貫目	同	同	同
	何百貫目	同	同	同
同貳番芽	何百貫目	同	同	同
	何百圓	同	同	同
同三番芽	何百何拾貫目	同	同	同
	何百何拾何圓	同	同	同
製造人夫	何百何拾人	同	同	同
	何百何拾何圓	同	同	同
同給料	何百何拾圓	同	同	同
	何百何拾貫目	同	同	同
炭量	何拾圓	同	同	同
	何百何拾貫目	同	同	同
薪量	何拾何貫目	同	同	同
	何拾圓	同	同	同

商標記號シタル何々ヲ以テ内外國人ノ信用ヲ得廣ク販輸スルニ至ル云々) 以上ノ文
例ニ準リ現様ヲ委敷記載スヘシ」
前書申告ノ件々相違無之候也

出品主

明治十六年 月 日

何 之 誰(印)
何縣下何國何郡何町區長或
何村ハ戶長

前書之通相違無之段保証仕候也

○第拾三號 五月十六日 農商務卿連名

各地方ノ便宜ニ從ヒ左ノ條項ニ照準シテ勸業諮問會并勸業委員ヲ設置スルコトヲ得

第一條 諮問會ハ各府縣勸業事務ニ付府知事縣令ノ諮問ニ備フルモノトス

第二條 諮問會員ハ府知事縣令ニ於テ管内農商務工事ニ名望アル者ヲ選テ之ニ充ツ其
人員并處務ノ順序等總テ府知事縣令適宜之ヲ定ム可シ

第三條 諮問會員ノ旅費日當ハ地方稅中勸業費ヲ以テ支辨ス可シ

第四條 勸業委員ハ區町村若クハ聯合區町村ニ於テ勸業ノ事ヲ擔任シ又ハ(區郡)長戶
長ノ諮問ニ備フルモノトス

第五條 勸業委員ノ人員撰擧方法及ヒ處務ノ順序等ハ區町村會又ハ聯合區町村會ニ於
テ之ヲ評定シ府知事縣令ノ裁可ヲ受ク可シ

第六條 區町村若クハ聯合區町村ニ於テ農業者同業會工業會又ハ農商工ヲ併セタル勸
業會其他同業會ヲ設置スルトキハ勸業委員ヲシテ會員タラシルコトヲ得

第七條 府知事縣令ニ於テ勸業委員ノ設置及第六條ノ各會設立ヲ要用ト認ムルトキハ
誘導シテ之ヲ設置セシムルコトヲ得此場合ニハ農商務卿ニ稟議シテ認可ヲ請ク可シ

第八條 勸業委員ノ旅費日當及第六條ノ各會諸費ハ區町村及聯合區町村ノ協議費ヲ以
テ支辨シ又ハ關係各業者ニ於テ協議支辨スルコトヲ得但有志者ヲ以テ組織スル者ハ
此例ニ非ラス

第九號 農商務卿及主務ノ官署ハ各地方勸業上ノ件ニ付諮問會又ハ第六條各會ノ意見
ヲ問フコトアル可シ

諮問會又ハ第六條ノ各會ハ勸業上公益ノ件ニ付農商務卿及主務ノ官署ニ意見書又ハ報告書ヲ呈スルコトヲ得

右布達候事

○第拾四號 五月二十六日 內務卿連名

今般第拾七號ヲ以テ布告布達施行期限ヲ改定シタルニ付到達日數左ノ通之ヲ定ム

到達日數

京都府	四日	大坂府	四日	神奈川縣	即日
兵庫縣	四日	長崎縣	十一日	新潟縣	五日
埼玉縣	即日	群馬縣	即日	千葉縣	即日
茨城縣	二日	栃木縣	二日	三重縣	四日
愛知縣	三日	靜岡縣	二日	山梨縣	二日
滋賀縣	四日	岐阜縣	四日	長野縣	四日
宮城縣	五日	福島縣	四日	岩手縣	七日

青森縣	十日	山形縣	五日	秋田縣	八日
福井縣	八日	石川縣	七日	富山縣	六日
鳥取縣	七日	嶋根縣	八日	岡山縣	六日
廣島縣	七日	山口縣	八日	和歌山縣	六日
德島縣	六日	愛媛縣	九日	高知縣	八日
福岡縣	九日	大分縣	十一日	佐賀縣	十一日
熊本縣	十一日	宮崎縣	十一日	鹿兒島縣	十二日

但富山佐賀宮崎ノ三縣ハ開關ノ日マテ發管廳ノ到達日數ニ依ル

右布達候事

○第拾五號 五月廿六日 大藏卿連名

造幣規則別冊ノ通相定本年八月十六日ヨリ施行シ明治十一年(七月)大藏省申第貳拾四號同十二年(十月)同省申第百壹號布達ハ右施行ノ日ヨリ廢止ス

但本年ハ本文申第百壹號布達第三條日限中ト雖モ地金ヲ受取ル可シ

右布達候事

造幣規則

第一條 大坂造幣本局若シハ東京該出張所ニ輸入スル内外人民ノ金銀地金ハ左記ノ日ヲ除キ毎日之レヲ受取ル可シ但時限ハ本局ニ於テハ午前九時ヨリ午後一時迄出張所ニ於テハ同九時ヨリ正午十二時迄トス

毎日曜日 大祭日 臨時休暇
 一月五日 九月一日ヨリ 一月一日ヨリ
 十月三十一日マテ 十二月二十九日ヨリ
 十一月三十一日マテ 十二月三十一日マテ

第二條 非常ノ事アリテ休業スルトキハ速ニ其旨ヲ布達シ地金受取方ヲ止ム可シ

第三條 輸入ノ金銀地金ハ左ノ高以上ニ非サレハ受取ツサル可シ但出張所ニ於テハ輸入高工程ニ超過スルトキハ受取方ヲ拒ムコトアル可シ

金地金 三拾チンス「トロイ」(凡貳百四拾八匁四分)
 銀地金 三百チンス「トロイ」(凡貳貫四百八拾四匁)

不純粹金銀地金
 舊金銀貨幣
 金銀混合地金 價格貳百圓

第四條 品位詳明ナル外國金銀貨幣ハ其品位ニ據テ受取ル可シ若シ試驗鑄解ヲ要スルトキハ輸入人ニ報知シ第六條ニ依リ之ヲ受取ル可シ但出張所ニ於テハ其試驗鑄解ヲ要スル者ノ外ハ之ヲ受取ツサル可シ

第五條 品位詳明ナル金銀地金ハ照査試驗ヲ爲シ其品位ニ據テ之ヲ受取ル可シ若シ試驗鑄解ヲ要スルトキハ輸入人ニ報知シ第六條ニ依リ之ヲ受取ル可シ

第六條 品位詳明ナラサル金銀地金或ハ内外國金銀貨幣ハ試驗鑄解ノ上試驗分析シ其品位ニ據テ之ヲ受取ル可シ

第七條 金銀地金若シハ内外國金銀貨幣ノ試驗鑄解ヲ要スル者其鑄解減ハ輸入人ノ負擔タル可シ

第八條 凡テ輸入ノ金銀地金ハ輸入人若シハ其代理者ヲ立會シテ坪量ニ本局ニ於テハ地金課長出張所ニ於テハ所長ノ假受取證ヲ交付シ試驗分析濟ノ上勘定書ニ試驗分析表ヲ添ヘ之ヲ輸入人ニ送付ス可シ

第九條 輸入地金勘定書ノ旨ヲ承諾シ之ニ捺印シテ回付スルトキハ輸入地金ノ價額

○對スル貨幣拂渡證書ヲ輸入入ロ交付シテ假受取証ト交換ス可シ但勘定書送付ノ日ヨリ三日以内ニ勘定書ヲ回付セサルトキハ承諾シタルモノト爲ス可シ

第十條 代リ貨幣ハ地金ヲ本局ニ輸入シタルトキハ日本銀行大坂又ハ神戸支店（若クハ代理店）出張所ニ輸入シタルトキハ日本銀行本店又ハ横濱支店（若クハ代理店）於テ左ノ期日ニ至リ之ヲ拂渡ス可シ但期日前貨幣拂渡ヲ望ム者ハ日本銀行本店又ハ其大坂支店ニ於テ一日萬分壹ノ割引ヲ以テ前渡ヲ爲ス可シ

試驗濟ノ日ヨリ

造幣適當金銀地金	同	本局ニ輸入シタルモノノ出張所ニ輸入シタルモノ	十日目
精製分析ヲ要スル地金 壹萬圓未満	同	同	二十五日目
同	同	同	十五日目
同	同	同	三十日目
同	同	同	二十日目
同	同	同	三十五日目

同 七萬圓未満

同 同 二十五日目

同 七萬圓以上

同 同 四十日目

但右期日休暇ニ當ルトキハ翌日拂渡ス可シ

第十一條 鑄造料ハ金貨幣ハ千分ノ七銀貨幣壹圓ハ千分ノ拾ヲ收入ス可シ若シ試驗鑄解ヲ要スル地金ナレハ更ニ千分ノ壹ヲ收入ス可シ

第十二條 精製分析ヲ要スル地金ヲ輸入シタルトキハ其地金ノ種類ニ應シ左ノ析料ヲ收入スヘシ但其地金千分中金銀七百五十分以上ヲ含有セサルトキハ需ニ應セズ
不純粹金地金

千分中金九百分以上	純金拾ヲンス「トロイ」ニ付	金壹圓
同 金八百五十分以上	同	金壹圓拾貳錢七厘
同 金八百分以上	同	金壹圓貳拾五錢四厘
同 金七百五十分以上	同	金壹圓三拾八錢壹厘

不純粹銀地金

千分中銀九百分以上

純銀拾チンス「トロイ」付

金貳拾六錢三厘

同 銀八百五十分以上

同

金貳拾九錢

同 銀八百分以上

同

金三拾壹錢七厘

同 銀七百五十分以上

同

金三拾四錢四厘

金銀混合地金

千分中金銀九百分以上

純金拾チンス「トロイ」付

金壹圓

同 金銀八百五十分以上

全金拾チンス「トロイ」付

金貳拾六錢三厘

同 金銀八百百分以上

全金拾チンス「トロイ」付

金壹圓拾貳錢七厘

同 金銀七百五十分以上

全金拾チンス「トロイ」付

金貳拾九錢

同 金銀七百五十分以上

全金拾チンス「トロイ」付

金壹圓拾貳錢七厘

同 金銀七百五十分以上

全金拾チンス「トロイ」付

金三拾壹錢七厘

同 金銀七百五十分以上

全金拾チンス「トロイ」付

金三拾四錢四厘

者ハ其半額ヲ減ス

第十三條 出張所ニ地金又ハ内外國金銀貨幣ヲ輸入シテ貨幣鑄造ヲ請求スル者ハ運費並保險料トシテ成貨壹万圓ニ付金六拾五圓ヲ納ム可シ但大坂ニ於テ成貨搬渡ヲ乞フ

第十四條 輸入ノ地金貨幣鑄造ヲ爲サスシテ返却スルトキハ左ノ費用ヲ收入ス可シ

試驗鑄解料

金地金

金銀混合地金(千分中金分百) 五百チンス「トロイ」未滿

金壹圓

同

金銀混合地金(分以上ノモノ) 五百チンス「トロイ」以上

金貳圓

同

金銀混合地金(分未滿ノモノ) 千チンス「トロイ」未滿

金貳圓

銀地金

金銀混合地金(千分中金分百) 千チンス「トロイ」未滿

金壹圓

同

金銀混合地金(分未滿ノモノ) 千チンス「トロイ」以上

金貳圓

同

金銀混合地金(分未滿ノモノ) 二千チンス「トロイ」未滿

金貳圓

試驗分析料

金地金

金銀混合地金

壹塊ニ付

金貳圓

銀地金

壹塊ニ付

金壹圓

照査試驗料

試驗分析料ニ準ス

第十五條 流通不便ノ貨幣ハ本局若クハ出張所ニ於テ鑑定シ左之量目以上ナレハ左ノ
手数料ヲ收入シテ之ヲ受取り其翌日代リ貨幣ヲ拂渡スヘシ

金貨幣量目五ヲンス(トロイ) (凡四拾壹)
匁四分

千分ノ三、半

壹圓銀貨幣量目五拾ヲンス(トロイ) (凡四百)
拾匁

千分ノ五

補助銀銅貨幣

量目ニ制限ナシ

無手数料

錆破目アリ又ハ音響惡キ貨幣ト雖モ全昧ヲ失ハス量目減少セサル者ハ金銀共一
枚ヲ以テ一枚ト交換シ手数料ハ受取ラサルヘシ

第十六條 金銀地金及ヒ金銀混合地金ニ含有スル雜物ハ渾テ返却セサルヘシ

○第拾六號 五月廿八日 大藏卿連名

明治十五年(十二月)第六拾三號ヲ以テ烟草稅則改定布告候ニ付テハ印紙別紙見本ノ通
相定ム (印紙見本略)

右布達候事

○第拾七號 六月一日 農商卿連名

明治十一年(十月)舊開拓使乙第貳拾四號布達森林監護假條例中第九條ヲ刪除シ向後野
桑保護ハ右森林監護假條例ニ準據可致且同年(十一月)同使乙第貳拾八號布達養蠶條例
ハ自今廢止ス

右函館縣札幌縣根室縣へ布達候事

○第拾八號 六月四日 大藏卿連名

明治十五年(十二月)第六拾三號布告烟草稅則本年七月一日ヨリ施行候ニ付左ノ通心得
ヘシ

烟草仲買人小賣人コトテ稅則施行前ヨリ製造烟草ヲ所持スル者ハ本年限リ其所持人ニ
於テ稅則第十三條ニ據リ印紙ヲ貼用スルヲ得但此場合ニ於テハ所持人ハ稅則第二十一
條ノ製造人ニ準シ自己ノ氏名住所ヲ附記スヘシ

稅則施行前既ニ裝置セル製造烟草ハ本年限リ其裝置ノ儘賣捌コトヲ得尤稅則第十三條
ニ照シ不足ニ係ル印紙ハ增加貼用スヘシ

印紙ハ舊長印紙及ヒ拾錢印紙ヲ除クノ外當分新舊取交セ使用スヘシ

舊長印紙及ヒ拾錢印紙賣捌所ニ就テ引換ヲ乞フヘシ

右布達候事

○第拾九號 六月四日 農商務卿連名

明治十四年(十二月)第壹號布達西洋形船々長運轉手機關手試驗規程第二條左ノ通改正
ス定時試驗ハ内國人ハ毎月第一第三水曜日外國人ハ毎月第二火曜日ヲ以テ東京試驗所
ニ於テ之ヲ開クヘシ若シ開カサル時ハ農商務省ヨリ其旨十五日以前ニ廣告スヘシ
右布達候事

○第貳拾號 六月四日 大藏卿連名

明治十五年(十二月)第六十三號布告煙草稅則中左ノ通心得ヘシ
第一項 稅則第二條製造人ハ未製造ノ煙草ヲ耕作人又ハ仲買人ヨリ買入レ之ヲ製造シ
仲買人又ハ小賣人ヘ賣渡スヲ云フ
第二項 稅則第三十一條煙草(營業者)トアルハ製造人仲買人ノミナ云フ
第三項 稅則第二十條煙草印紙ノ貼用ハ第一號雛形ノ通之ヲ貼用シ其價格及量目ヲ付

記スヘシ帶印紙ハ結束ノ上兩端ニ余紙フルモ之ヲ截斷スヘカラス

第四項 稅則第二十一條製造人ノ氏名住所ハ箱結紙包ハ其見易キ箇所帶印紙ハ其印紙
彩紋ノ側面ヘ記載スヘシ

第五項 稅則第十四條煙草印紙ノ消印ハ七分以上ノモノヲ用非黒肉ヲ以テ押捺スヘシ

第六項 稅則第十七條ニ據リ輸出煙草ノ戻稅ヲ請フ者ハ第十三條ノ印稅區別ニ依リ裝
置種類ヲ分チ個數量目及ヒ印紙稅金額ヲ仕譯ケタル書面ヲ以テ其論出港ノ稅關ヘ出
願シ檢査ヲ受クヘシ

第七項 稅則第二十三條ノ帳簿ニハ左ノ件々ヲ記載スヘシ

- 製造人 年月日種類及ヒ未製造煙草何程ヲ何某ヨリ買入
レ何程ニ製造シ其裝置種類定價區別量目個數代
價及ヒ賣渡ノ數等ヲ記スヘシ
- 仲買人 年月日種類價格量目及ヒ賣主ノ氏名住所ヲ記ス
ヘシ但未製造煙草ト製造煙草トハ帳簿若シハ記
入口譯ヲ異ニスヘシ已下之ニ準ス
- 煙草製造帳
- 煙草買入帳
- 同

烟草賣渡帳

年月日種類價格量目及ヒ買主ノ氏名住所ヲ記ス
ヘシ但書前ニ同

小賣人

烟草買入帳

未製造品買入ノコトヲ除クノ外總テ仲買人ノ帳
簿ト同

第八項 稅則第二十七條第二十八條ノ届出ヲ爲ストキハ第二號離形ニ倣ヒ之ヲ調製ス
ヘシ

第九項 稅則第二十九條營業人ノ標札ハ第三號離形ニ倣ヒ各自之ヲ調製スヘシ

第十項 烟草製造人ハ其製造所及ヒ器械ノ員數増減共其時々管轄廳ヘ届出ヘシ但賃切
リニ付スルモノハ其賃切人ノ氏名住所并使用スル器械ノ員數及ヒ増減トモ其時々管
轄廳ヘ届出ヘシ

第十一項 仲買人小賣人ニシテ裝置烟草ヲ五匁以下崩賣ニ爲ストキハ稅則第十五條ニ
據リ結束スヘシ但此場合ニ於テハ仲買人小賣人ハ第四項第五項ニ據リ自己ノ氏名住
所ヲ付記スヘシ

右布達候事

第二號離形

明治 何年何月ヨリ 何年何月マテ 壹ケ年分烟草及印紙出入高計算帳

未製造ノ烟草越高	全 買入高
全 賣入高	全 賣捌高
差 引 殘 高	製造烟草越高
全 買入高	全 賣捌高
差 引 殘 高	烟草印紙越高
全 買入高	

全賣棚高

差引殘高

右之通相違無之候也

年月日

府知事宛

製造
仲買
小賣
人住所姓名

第三號雛形

鑑札番號

烟草
製造
仲買
小賣
營業

營業人住所姓名

木札 寸法巾八寸堅二尺九寸

○第貳拾壹號

六月二十二日 內務卿運名

凡ソ官報ニ登錄シタルモノハ新聞紙條例ニ依リ記載スルコトヲ得サレ者ト雖モ各新聞

紙ニ於テ其文ヲ抄録スルコトヲ得

官報ニ於テ新聞紙ニ記載シタル事項ノ誤ヲ正ストキハ新聞紙條例第廿九條ニ從ヒ正誤ノ全文ヲ登錄スヘシ

右布達候事

○第貳拾貳號 六月二十五日 農商務卿運名

本年(三月)第八號ヲ以テ及布達候第二回內國繪畫共進會規則別冊ノ通之ヲ定ム
右布達候事

明治十七年第二回內國繪畫共進會規則

第一條 本會ハ明治十七年四月十一日ヨリ五月三十日迄東京上野公園内ニ於テ開クヘシ

第二條 會場ハ毎日午前第八時ニ開キ午後第五時ニ閉ツヘシ

第三條 本會事務所ハ十七年二月十五日ヨリ上野公園内ニ開クヘシ

但事務所開設前ニ係ル事務ハ農商務省博覽會掛ニ於テ取扱フヘシ

第四條 洋法ノ畫ヲ除クノ外流派ノ如何ヲ問ハス總テ出品スルヲ許スト雖モ燒繪時繪

繡繪染繪織繪及ヒ猥雜戲狂ニ屬スル圖書ノ類并ニ他人ノ畫或ハ未ダ卒業セザル學校生徒ノ畫キタルモノハ出品スルヲ許サス

第五條 出品ハ設色ト水墨トニ拘ラス新ニ畫キタル疎密ニ様ニ陳トハ草畫密トハ眞畫ヲ謂フヘノ堅幅葉ニニ限ルヘシ

第六條 堅幅ノ絹紙ハ堅四尺五寸幅ニ尺ニシテ之ヲ假枰ニ照シ有色ノ絹紙ヲ以テ其級ヲ包ムコ止メ其總尺ハ堅四尺八寸幅ニ尺三寸ニ作ルヘシ

第七條 出品セント欲スルモノハ其居住地ノ管轄廳(本貫寄留ニ拘ラス)ニ出願ヲテ許可ヲ受クヘシ該廳ニ於テハ本則ニ牴觸セサルモノハ之ヲ許可セ管內出品ノ概數(第二十六條ニ從ヒ區別ス)ヲ十七年一月十日迄ニ農商務省博覽會掛ニ通知スヘシ

第八條 出品目錄ハ別紙第一號書式ニ倣ヒニ通履歷書ハ別紙第二號書式ニ倣ヒ一通ヲ製シ管轄廳ニ差出スヘシ該廳ニ於テハ之ヲ取纏メ十七年二月十日迄ニ農商務省博覽會掛ニ送付スヘシ

第九條 出品總目錄ハ本會事務所ニ於テ編纂スヘシ

第十條 繪事上ノ著述有モノハ己ニ印刷スルト否トテ問ハス出品ニ添ヘテ差出スヘシ但前會出陳ノ著述ハ其後校訂又ハ増補シタルモノニ非サレハ之ヲ要セス

第十一條 出品コハ事務所ヨリ下附スル所ノ小札ニ住所氏名ヲ記載シ之ヲ附シ又賣品ニハ其賣價ヲ記載シタル小札非賣品コハ非賣品ノ小札ヲ附スヘシ

第十二條 出品中歴史ニ關スル圖畫ニハ其解說肖像コハ其人名風景ニハ其地名ヲ記載シテ之ヲ附スヘシ

第十三條 開會中出品ヲ賣買スルヲ得ト雖モ閉場後ニ非サレハ搬出スルヲ許サス

第十四條 賣買ノ契約ヲナセシ者コハ事務所ニ下付スル所ノ約定簿ノ小札ヲ附スヘシ

第十五條 出品ノ運送陳列及ヒ出品人或ハ代理人ノ往復滞在等ニ係ル費用ハ總テ自辨スルヘシ

第十六條 出品ハ開場前ニ必ズ陳列ヲ終リ閉場後七日間ニ搬出スヘシ

第十七條 出品人或ハ代理人ハ出品上ノ事ニ關シテハ總テ本會掛員ノ指揮ニ從フヘシ

第十八條 出品人ノ便利ヲ圖リ東京府下ニ於テ出品委託引受所ヲ設クヘシ

但引受所ノ位置取扱ノ手續等ハ農商務省博覽會掛ヨリ追テ報告スヘシ

第十九條 來觀人ハ入場ノ節入場券ヲ門衛ニ渡スヘシ

但入場券ハ一人一葉ニ限ル滿五歳以下ノ小兒ハ之ヲ要セス

第二十條 入場券料ハ平日五錢日曜日拾錢月曜日三錢トス

第二十一條 出品人或ハ代理人ニハ常用門鑑ヲ下付シ諸職工傭夫等ニハ入場ノ都度臨時門鑑ヲ下付スヘシ

但門鑑ハ他人ニ貸與スルヲ禁ス

第二十二條 本會事務所ハ出品ニ對シ相當ノ保護ヲナスト雖モ若シ盜難火災風震等其

他避クヘカフサル事故ニヨリ生スル損害ハ其責ニ任セサルモノトス

第二十三條 本會事務所ノ允可ナクシテ場内或ハ陳列品ヲ寫真シ又ハ看護人ノ承諾ナ

クシテ陳列品ニ觸ル、ヲ許サス

第二十四條 出品優等ノモノニハ褒賞ヲ授與スヘシ

第二十五條 出品ノ審査ハ開場當日ヨリ始メ褒賞授與式ハ十七年五月二十日ヲ以テ執

行スヘシ

行スヘシ

第二十六條 出品陳列區分 第一區 巨勢土佐佳吉派ノ類 第二區 狩野派ノ類

第三區 支那南北派ノ類 第四區 菱川宮川派ノ類 第五區 圓山四條派ノ類

第六區 第一區ヨリ第五區ニ至ルノ畫風ニ類似ニセス全ク流派ヲ異ニスルモノ、類

第七區 新ニ撰軸ヲ出シ別ニ見解ヲ開キタルモノ

右ニ區分スル所ハ畫ノ様異同ニ從ヒ之ヲ類集スル者タルヲ以テ派名ノ如キモ單ニ其標

準トスル所ヲ示スノミ故ニ派名ヲ明記セサルモノハ其畫樣ノ類似スル區内ニ陳列シ其

餘ハ第六第七ノ兩區内ニ陳列スヘシ

明治十七年 第二回内國繪畫共進會附則

第一條 本邦及ヒ支那ノ古畫ニシテ模範トナルヘキモノヲ別室ニ陳列シテ參考ニ充ツ

之ヲ所藏スルモノハ其意ヲ體シ務メテ出品スルヲ要ス

第二條 出品セント欲スルモノハ第三號書式ニ倣ヒ目錄一通ヲ製シ十七年三月一日迄

本會事務所ニ送付スヘシ

備考名目

第三條 現品ハ鑑査ノ上品主ト協議シ陳列日限ヲ定ムルモノトス

但出品ヲ要セサルモノト認ムルトキハ直ニ之ヲ返付スルコトアル可シ

第四條 出品中優等ノモノハ之ヲ寫眞又ハ縮圖シテ印刷スルコトアリトス若シ之ヲ欲セサルモノハ其旨ヲ出品目錄中ニ記載スヘシ

第五條 本則第二十五條其他參考室出品ノ趣旨ニ反スル條々ハ此ノ附則ニ適用セサルモノトス

第一號書式

用紙半紙

出品目錄

本籍又ハ寄留ノ(府縣郡區)町村名番地

族氏名

何區
何派

何年何月生何年何月號

第一號 圖名 設色 絹又ハ紙 非賣品ハ非賣ト記シ賣品ハ賣價ヲ記スヘシ

第二號 全疎 全全 全

歷史上其他詳細ノ說解ヲ要スルモノハ茲ニ記載スヘシ

著述ノ部

第一號書	冊數	非賣品ハ非賣ト記シ賣品ハ賣價ヲ記スヘシ
第二號	全	
第三號	全	

第二號書式

用紙半紙

履歷書

本籍

寄留

氏名

何年何月生何年何月號

一父ノ氏名 號アルモノハ併セ記入スヘシ

一師ノ氏名號

一履歷號

官給金書

太政官布達之部

一〇八十五

第三號書式

用紙半紙

古書出品目錄

本籍又ハ寄留
府郡
縣區
町村名番地
族

出品氏名

第何號	圖	樣	筆	者	幅軸其外	數	氏名
-----	---	---	---	---	------	---	----

續寫斷ノ分ハ番號欄内ハ其旨記載スヘシ

○第二十三號 六月廿五日 大藏卿連名

明治五年十一月太政官第三百五十三號達同八年三月大藏省甲第六號布達本年八月十五日限、廢止ス

右布達候事

○第貳十四號 七月三十日 農商務卿連名

明治十一年五月第八號布告株式取引所設立ノ儀更ニ今般兵庫縣下神戸港ニ於テ一箇所

差許ス

右布達候事

○第貳十五號 七月三十日 農商務卿連名

神戸株式取引所ニ於テ當分ノ内金銀貨幣取引ヲ差許ス

右布達候事

○第貳拾六號 七月卅一日

明治十年(十二月)第八十八號布告ニ依リ十八年ニ於テ開設スヘキ第三回内國勸業博覽會ハ二十二年ニ延期ス

右布達候事

○第貳十七號 七月卅一日 農商務卿連名

來ル明治十八年四月一日ヨリ六月二十日迄東京上野公園ニ於テ繭絲織物陶漆器共進會ヲ開設ス(但本文品種ハ左ノ制限ニ依リ該會規則ハ追テ布達スヘシ)

一載

- 一 絲生糸及ヒ機械取木綿絲ニ限ル
- 一 織物絹木綿麻毛ノ織物及ヒ各種ノ交織物ニ限ル
- 一 陶漆器飲食器ニ限ル

右布達候事

○第二十八號 八月六日 農商務卿連名

米商會所及株式取引所ノ仲買人ト爲ラント欲スル者農商務卿ノ認許ヲ得タルトキハ認許料トシテ金三十拾圓ヲ農商務省ニ納ムヘシ

右布達候事

○第貳拾九號 八月廿四日 工部卿連名

明治十五年(四月)第七號ヲ以埼玉縣下川口ヨリ群馬縣下前橋マテ鐵道建築ノ儀布達候處今般右川口ヨリ東京府下板橋新宿目黒等ヲ經テ品川マテ線路ヲ建設シ同所ニ於テ東京橫濱間ノ官線ニ接續セシム

右布達候事

○第三拾號 九月七日

韶子内親王薨去ニ付東京府下ハ本日ヨリ御葬送當日マテ其他ノ地方ハ布達到達ノ日ヨリ三日間歌舞音曲停止セシム

右布達候事

○第三拾壹號 九月八日

章子内親王薨去ニ付前同斷

右布達候事

○第三拾貳號 十月三日 外務卿連名

朝鮮國間行里程取極約書別紙ノ通訂定ス

(別紙)

朝鮮國間行里程取極約書

第一條 兩國政府ハ(日本曆明治十五年八月三十一日朝鮮曆壬午年七月十七日)各全權

大臣ノ議定シタル續約第一款ノ旨趣ニ依リ朝鮮國仁川元山釜山ノ三港ニ於テ今年可
取廣間行里程ヲ雙方委任ノ大臣協議ノ上左ノ通り定メタリ

第二條 仁川港

東ハ安山始興果川ヲ限ル 東北ハ陽川金浦ヲ限ル 北ハ江華島ヲ限ル

元山港

西ハ德源府管下馬息嶺ヲ限ル 南ハ安邊府管下古龍池院ヲ限ル

北ハ文川郡樂加直ヲ限ル

釜山港

東ハ機張ヲ限ル 西ハ金海ヲ限ル 南ハ鳴湖ヲ限ル 北ハ梁山ヲ限ル

右ニ定メタル各地ノ境畧ニハ兩國官吏立會ノ上標木ヲ立テ以テ四方ノ限止ヲ明カ
スヘシ

第三條 來ル日本曆明治十七年朝鮮曆甲申年更ニ擴張スヘキ里程ノ境界ハ其期ニ至リ
兩國委員議定ノ上此約書ノ附録ト爲スヘシ

第四條 此里程内ニ於テ日本人隨意遊獵スルヲ得ルト雖トモ人家接近ノ地並ニ朝鮮政
府ノ禁制スル場所ニ於テ發銃スヘカラス

第五條 日本人此里程内ニ在テ或ハ暴行ヲナシ又ハ境界ヲ踰越スル者アル時ハ地方官
吏ニテ之ヲ取押ヘ日本領事館ニ送交シ或ハ其地ニ引留置領事官ニ通知シ處分ヲナサ
シムヘシ但シ引留又ハ送致ノ際苛虐ノ取扱ヲ爲ス可ラサルハ勿論引留時間ハ領事館
往復ニ必要ナル時間ニ限ルヘシ

第六條 此里程内ニ於テ朝鮮人往來ノ日本人ニ對シ暴行ヲ爲ス者アルハ地方官速カニ
吏ヲ派シ之ヲ救護シ其暴行人ヲ嚴罰スヘシ

第七條 日本人間行ノ際或ハ日暮歸ル能ハス或ハ途中疾病事故等有テ行ク能ハサル者
ニ遇ハ沿路ノ人民其請ニ應シテ轎馬ヲ雇ヒ或ハ其家ニ休宿セシムル等懇切ノ取扱ヲ
ナスヘシ但シ其轎馬賃宿料等ハ該日本人ヨリ完済スヘシ

第八條 第四條ヨリ以下ノ諸條ハ朝鮮政府ニテ里程内ノ鄉村及道路ニ揭示シ人民ヲ
シ能ク遵奉セシムヘシ

右確實ナルヲ証シ兩國ノ各委任大臣記名調印スル者也

大日本國明治十六年七月二十五日

大朝鮮國開國四百九十二年六月二十二日

全權大臣辦理公使竹添進一郎 印

全權大臣督辦交涉通商事務閔泳穆 印

○第三拾三號 十月十五日

朝鮮國海岸ニ於テ犯罪ノ日本國漁民取扱規則別紙ノ通協議決定ス

右布達候事

約定シタル朝鮮國海岸ニ於テ犯罪ノ日本國漁民取扱規則

第一條 朝鮮國ノ約定海岸ニ於テ日本國人朝鮮國ノ法禁ヲ犯シタルトキハ水陸共左ノ箇條ニ照シ取扱フヘシ

第二條 朝鮮國官吏ハ法禁ヲ犯セシ日本國人ヲ取押ヘタルトキハ其罪證ヲ具録シ之ヲ添テ其日本人ヲ最寄開港場ノ日本領事官ヘ引渡シ相當ノ處分ヲ要求スヘシ日本領事

官ハ速ニ其要求ニ應ジ之ヲ審査シ照律處斷スヘシ但シ朝鮮國官吏取押ヘ又ハ護送ノ際苛虐ノ取扱ヲナスコト無ルヘシ

第三條 犯罪ト認ムヘキ日本人ヲ海陸孰レヨリ護送スルモ朝鮮官吏ノ勝手タルヘシ但シ成丈速カニ護送シ事故ナシテ徒ニ罪犯ヲ其地ニ淹留スヘカラス

第四條 朝鮮國ノ約定海岸ニ於テ罪ヲ犯セシト認ムル日本人ヲ海路ヨリ護送スルトキハ朝鮮官吏日本人ノ船舶ニ乗込或ハ別船ニ在テ之ヲ引來シ俱ニ其便宜ニ任ス如シ陸路ヨリ護送スルハ其日本船ニ逐テ引渡ス迄ノ間ハ地方官ニ之ヲ監守シ毀失セシムルコト無ルヘシ且其船具漁具其外運搬シ難キ物品ハ目錄ニ作り罪犯ニ添テ之ヲ送付スヘシ

第五條 如シ薪水食糧ヲ得ルカ爲メ又ハ獲タル所ノ魚類ヲ賣買スル爲メ上陸シ陸上ニ於テ其犯罪同行中若干名ノミニ係ルトキハ其若干名ノミニテ手續ニ依テ護送シ其他ハ之ヲ拘引スルヲ無ルヘシ又海上ナレハ其罪犯ヲ除クノ外殘員猶航海ニ堪ルトキハ朝鮮官吏ハ其罪犯ノミニテ護送シ其他ハ之ヲ放還スヘシ

太政官布達之部

第六條 此規則ハ實行ノ上更ニ増損スヘキモノ有レハ雙方協議改正スルヲ得ヘシ
右確實ナルヲ證シ兩國ノ各委任大臣茲ニ記名調印スルモノ也

大日本國明治十六年七月二十五日

大朝鮮國開國四百九十二年六月二十二日

全權大臣辨理公使竹添進一郎 印

全權大臣督辦交涉通商事務閣泳穆 印

○第三拾四號 十月廿三日 內務卿連名

今般第三拾五號ヲ以テ醫師免許規則布告相成候ニ付醫術開業試驗規則別冊ノ通相定メ
明治十七年一月一日ヨリ施行ス

但明治十二年(二月)內務省甲第三號布達ハ同日ヨリ廢止ス

右布達候事

(別冊)

醫術開業試驗規則

第一條 醫術ヲ開業セントスル者ハ此規則ニ據リ試驗ヲ受クヘシ

第二條 內務卿ハ毎年二回醫術開業試驗ヲ舉行スヘシ但試驗ヲ舉行スヘキ地方及ヒ試
驗期日ハ六ヶ月前之ヲ內務卿ヨリ告示スヘシ

第三條 內務卿ハ醫術開業試驗ヲ舉行スル毎コ官立及ヒ府縣立醫學校病院ニ從事スル
者又ハ地方ニ於テ學術名望アル醫師理化學者等ヲ選ヒ試驗委員ヲ命ムヘシ

但齒科醫術開業試驗ニ於テハ齒科醫壹名ヲ試驗委員ニ加フルコトアルヘシ
第四條 內務卿ハ主事者ヲ派遣シ試驗一切ノ事ヲ監督整理セシムヘシ

第五條 醫術開業試驗ハ之ヲ二期ニ分チ前期試驗後期試驗トス前後二期ノ試験ヲ同時
ニ受クルコトヲ得ス (但齒科醫術開業試験ハ全科一時ニ受クルモノトス)

第六條 試驗科目ヲ定ムルコト左ノ如シ

前期試驗科目

- 第一 物理學
- 第二 化學
- 第三 解剖學
- 第四 生理學

後期試驗科目

第一 外科學 第二 內科學 第三 藥物學 第四 眼科學

第五 產科學 第六 臨床實驗

第七條 齒科試驗科目ヲ定ムコト左ノ如シ

第一 齒科解剖及生理 第二 齒科病理及治術 第三 齒科用藥品

第四 齒科用器械 第五 實地試驗

第八條 前期試驗ハ一ケ年半以上後期試験ハ更ニ一ケ年半以上修學セシ者ニ非レハ之ヲ受クルコトヲ得ス

第九條 前期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ修學ノ履歷書ヲ副ニ後期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ履歷書及前期試験及第ノ證書ヲ副ニ毎年六月十二月中地方廳ニ差出スヘシ地方廳ハ翌月五日迄ニ其書類ヲ取纏メ内務省ニ進達スルモノトス但履歷書ニハ其師若シハ他ノ開業醫師二名以上ノ保証アルヲ要ス

第十條 地方廳ニ於テ試験出願者中醫事ニ關シ犯罪若シハ不正ノ行爲アリト認ムル者アルハ之ヲ内務省ニ於テハ中央衛生會ノ審議ヲ經其情狀ニ因リ期限ヲ定メ試験ヲ

許サレコトアルヘシ

第十一條 試験問題ハ試験主事者試験委員協議ノ上之ヲ撰定シ試験場ニ臨ミ受験人ヲシテ答答セシムヘシ(但時宜ニ口答セシムルコトアルヘシ)

第十二條 試験主事者ハ試験終ルノ後試験委員ト與ニ其成績ヲ評定シ及第シタル者ニハ直チニ及第證書ヲ與フヘシ(但及第證書ニハ試験主事者試験委員連署スヘシ)

第十三條 試験ニ落第シタル者ハ半年ヲ終ルニ非レハ再試験ヲ請フコトヲ得ス

第十四條 醫術開業試験ヲ受クル者ハ試験開場ノ前日迄ニ左ノ手数料ヲ納ムヘシ
前期試験手数料 金三圓 後期試験手数料 金五圓 齒科試験手数料 金五圓

第十五條 受験中疾病及ヒ其他ノ事故アリテ試験ヲ中止シ又ハ落第シタル者ト雖モ前條ノ手数料ヲ返付セス

○第三拾五號 十一月五日 農商務卿連名
本年(七月)第貳拾七號ヲ以テ及布達候補絲緞物陶漆器共進會規則別冊ノ通之ヲ定ム
右布達候事

(別冊)

繭絲織物陶漆器共進會規則

第一章 綱領

第一條 本會ハ明治十八年四月一日ヨリ六月二十日迄東京上野公園内ニ於テ開クヘシ

第二條 本會ノ出品ハ四區ニ分ツ即チ左ノ如シ

第一區 繭 第二區 絲

第一類 生絲 第二類 器械取木綿絲

第三區 織物

第一類 絹織物 第二類 木綿織物 第三類 麻、毛ノ織物及ヒ各種ノ

交織物

第四區 陶漆器

第一類 陶飲食器 第二類 漆飲食器

第三條 出品ハ明治十七年一月以後ノ内國製産物ニ限ルモノトス

但比較ノ爲メ外國品及ヒ該年度以前ノ製産物ヲ添出スルハ妨ケナシ

第四條 出品數量ノ制限左ノ如シ

繭 一種ニ付一升ヨリ三升迄

絲 (生絲一種ニ付一斤ヨリ百斤迄)

(器械取木綿絲一種ニ付十總ヨリ一丸迄)

織物一種ニ付反物ハ二反ヨリ三反迄匹物ハ一匹ヨリ二匹迄一枚物ハ一枚ヨリ三枚迄

陶漆器 (陶飲食器一種ニ付揃物ハ一揃ヨリ二揃物ハ一箇物ハ二箇ヨリ三箇迄)

(漆飲食器同前)

第五條 總テ出品セント欲スル者ハ其管轄ニ願出許可ヲ受クヘシ管轄廳ニ於テ別紙書

式第一號ニ倣ヒ出品目錄ニ通テ製シ明治十七年十二月限り本會事務所ニ差出スヘシ

第六條 出品遞送費及ヒ陳列費又ハ飾箱飾臺等ハ出品主ノ自辨ナルヘシ

但飾箱ハ都合ニヨリ有合ノ分ヲ貸與スルコトアルヘシ

第七條 出品ハ事務所ニ於テ相當ノ保護ヲナスト雖トモ萬一盜難火災風震等避クヘカ

ラサル事故ニテ破損紛失スルトキハ其責ニ任セサルモノトス

第二章 褒賞

第八條 出品審査ノ上優等モノノハ褒賞ヲ授與ス其等級左ノ如シ

一等賞 二等賞 三等賞 四等賞 五等賞 六等賞 七等賞

第九條 一人コト數類ノ出品ヲナシ毎類優等ナル時ハ各相當ノ褒賞ヲ與フヘシ

但出品主ニ非サルモ出品ニ對シテ特別ノ功勞アルモノハ既往現在ヲ問ハス褒賞ヲ與フルコトアルヘシ

第十條 褒賞授與式ハ六月十日ヲ以テ執行スヘシ

第三章 審査

第十一條 審査官ハ出品ヲ審査シ其優劣ヲ判シ褒賞ノ等級ヲ擬シ薦告文ヲ作り之ヲ審査官長ニ差出スヘシ審査官長ハ幹事ト商議按定シテ之ヲ農商卿ニ差出シ以テ其認可ヲ請フヘシ

第十二條 出品主コシテ審査官ニ選バントル者ハ其出品ノ審査ニ加フルヲ得ス

第十三條 審査ハ四月十日ニ始メ五月三十日ニ終ルモノトス

第四章 出品主

第十四條 繭出品主ハ別紙書式第二號生絲出品主ハ第三號其他出品主ハ第四號ニ依ヒ出品解説一通ヲ製シ管轄廳ヲ經テ明治十八年二月限り事務所ニ差出スヘシ

第十五條 繭出品主ハ年内蠶卵紙一枚以上ヲ飼養スル者生絲出品主ハ年内五斤以上ヲ製スル者ニ限ルヘシ

第十六條 出品主ハ都合ニ因リ其出品ニ對シ解説ヲナシ得ル者ヲ以テ代理人トナシ或ハ數人協同シテ總代人ヲ出スモ妨ケナシ

第十七條 出品ノ陳列ハ二月二十日ニ始メ三月二十八日ニ終ルモノトス故ニ出品主ハ成ルヘク二月二十日以前其出品ヲ各自便宜ニ從ヒ東京ニ遞送シ置キ其陳列ニ從事スヘシ (但陳列ニ付テハ都ヲ本會掛員ノ指揮ニ從フヘシ)

第十八條 出品主ハ事務所ヨリ下付スル所ノ小札ニ其住所氏名等ヲ記シ每品ニ添附スヘシ (但非賣品賣買約定濟附札モ事務所ヨリ下付スヘシ)

第十九條 出品賣買約定濟ノモノハ其品出ニ賣買約定濟ノ札ヲ添附スヘシ但其他物出品ハ閉會後ニ非サレハ搬出スルヲ許サス

第二十條 出品同種ノ物品ニシテ内外博覽會或ハ共進會等ニ於テ賞牌褒狀等ヲ得タル者ハ其模形又ハ寫圖ヲ掲ケ置クヘシ

第二十一條 出品主ハ閉會後十五日限り其出品ヲ場外ニ搬出スヘシ

第二十二條 出品主ハ事務所ヨリ下付スル所ノ門鑑ヲ携帯シ會場ニ出入スヘシ

第五章 來觀人

第二十三條 會場閉會時間左ノ如シ尤臨時來觀人ノ入場ニ差止ムルコトアルヘシ

四月一日ヨリ 同十五日迄 (午前第九時開場午後第四時閉場)

四月十六日ヨリ六月廿日迄 (午前第八時開場午後第五時閉場)

第二十四條 來觀人ハ入場ノ節入場券一枚ヲ門衛ニ渡スヘシ

但滿五歲以下ノ幼者ニ此限アラズ

第二十五條 入場券料ハ一枚金二錢トス

第二十六條 入場券ヲ持參スル者ト雖トモ狂疾或ハ爛醉者ト認ムル時ハ入場ヲ許サズ或ハ會場ヨリ立去ラシムルコトアルヘシ

第二十七條 來觀人ハ出品主或ハ看護人ノ承諾ヲ經ルニ非サシ出品ニ手ヲ觸ルヘカラス

第六章 賣店

第二十八條 出品主(東京府區内ノ者ヲ除ク)ニシテ賣店建設ヲ望ム者ハ其所用ノ地坪家作等ヲ取調ヘ之ニ繪圖ヲ添ヘ明治十七年十二月限り管轄廳ヲ經テ事務所ヘ願出ツヘシ(但本會ノ都合ニヨリ許可セサルコトアルヘシ)

第二十九條 賣店建設地ハ會場外ニ於テ無稅貸與スヘキニ付總テ本會掛員ノ指揮ニ從ヒ建設スヘシ(但建設ニ關スル一切ノ費用ハ出品主ノ自辨タルヘシ)

第三十條 賣品ハ出品ト同種ノ物ニ限ルヘシ

但賣品遞送ノ節ハ出品ト區別ヲ立テ混交セシムヘカラス

第三十一條 月曜日毎ニ一周間ノ賣上ケ品數金額等ヲ事務所ニ届出ツヘシ

第三十二條 賣店ハ開會當日ヨリ閉會後十日迄開クコトヲ許ス

但閉店後三十日限り取拂ヒ跡地ヲ元ノ如ク取直シ返納スヘシ

(書式第一號) 第何區第何類

(用紙十三行官用野紙)

出品目録

品名	数量	置容	積住	所姓	名
何品	何斤何匁何匹何段何枚何打何筋何張何揃何組何個トカ	長何尺巾何尺トカ何尺四方トカ	何(府縣)下何國何(郡區何町村)	何	之誰

前書之通出品相違無之候也

年月日

府縣委員官姓名印

備後縣織物陶漆器共進會

御中

(書式第二號)

(用紙半紙)

繭解説

出品主	何府下何國何郡何町何番地族籍職業	何之誰
名稱	此區ハハ繭ノ黄白及ヒ通稱ヲ記スヘシ (譬ハ赤引鬼縮又昔姫蠶等ノ類)	
出品高	此區ハハ出品ノ數量ヲ記スヘシ (譬ハ八何升)	
桑ノ名	此項ハ桑樹ノ種類及ヒ桑田培養等ノコトヲ左ノ表面ノ區毎 ニ記スヘシ	
桑田一反歩付	市平トカ十文字トコボントカ	
培養ノ量及ヒ品種	酒粕何百目油粕何百目トカ	
培養ノ季節	何月何日項トカ	
桑苗仕立方	根分ケトカ枝フセトカ實マキトカ	
桑樹仕立方	刈桑トカ二尺上ヨリ株トカ木立トカ	
一反歩植樹ノ數	何本トカ何株トカ	

植付ヨリ五ヶ年目
一反ノ桑ノ量
何駄トカ何貫トカ

桑木ヨリ正葉
ヲ得ル分合
凡何分位

所有桑園ノ段別
何町何段歩

箇目	年度	十	五	年	十	六	年	十	七	年
----	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---

桑ノ相場
何駄ニ付何圓何錢トカ
全
上
全
上

養蠶法此項ハ左ノ如ク區毎ニ記スヘシ

原種ノ紙數
何拾何枚

成繭ノ數量
上繭何石何斗 王繭全上 屑繭全上

掃立ヨリ揺落シ迄
ノ日數
何十何日

原紙一枚ニ付庭起ノ
籠數又ハ躰坐ノ數
籠ハ長何尺 何十籠躰坐圓形何尺何十枚
横何尺

育 法
温陵育トカ 清涼育トカ

熟蠶ノ扱ヒ方
拾ヒ揚ケトカ 熟蠶ニマブニスルトカ

原種一枚ニ付成繭
迄平均人員
何人何分

原種一枚ニ付成繭
迄平均ノ費用
何圓何錢

前同斷養桑ノ目方
何駄トカ何貫目トカ

原 種
此項ハ蠶卵紙ノ由來及ヒ保存ノ方法ヲ記スヘシ

(譬ヘハ何年ニ何國何ノ誰ノ卵紙ヲ用ヒ何年ヨリ自製ノ卵紙奉ト
ス或ハ年々何國何ノ誰種ヲ用フトカ又保存方ハ秋風ノ起ルテ
俟テ桐ノ箱ニ入レトカ寒中何日頃水ニ浸シ發生ノ頃ハ何月何
日ノ頃箱ノ中ヨリ取出シ上下掛ケ換ヘ置云々ノ類

養蠶ノ數
此項ニハ出品ノ繭ニ拘ハラズ出品人何程ノ養蠶セシテ左
ノ表面ノ區毎ニ記ス尤モ製絲種ノ分ヲモ加ヘテ販賣及ヒ
費用トモ總計ヲ記スヘシ

箇目	年度	十	五	年	十	六	年	十	七	年
----	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---

成繭ノ石數
何石何斗 全
上
全
上

販賣代價
何百何拾何圓 全
上
全
上

費用合計 何拾何圓全

上全

上

検査表アルモノハ之ヲ添フヘシ
發賣方法ノ沿革及ヒ出品主履歷

此項ヘハ創業ヨリ現今迄ノ沿革盛衰發明及ヒ共進會又ハ博覽等ニ於テ受賞云々ヲ詳記スヘシ

前書解説之件々相違無之候也

出品主

何之誰印

年月日

前書之通相違無之依テ保証仕候也

何(府縣)下何國何(郡區)何(町村)區長或ハ戶長

何之誰印

府縣委員

官姓何印

(書式第三號)

(用紙半紙)

生絲解説

出品主	何(府縣)下何國何(郡區)何(町村)區長或ハ戶長
名	此區ヘハ生絲通稱、把東方等ヲ記スヘシ (譬ヘハ二本松器械絲、前橋坐繰折返シ、提々、島田、鐵砲造、等、類 此區ヘハ出品ノ數量ヲ記スヘシ (何斤)
出品高	此區ヘハ出品ノ生絲ニ用ヒタル繭ノ種類出所等ヲ記スヘシ (譬ヘハ何州何郡何ノ誰製造ノ繭或ハ手作)
供用繭	器械製絲法 此項ヘハ製絲ノ順序ヲ記スヘシ則左ノ表面ノ如シ
運轉ノ力	蒸氣ナルハ何馬力水車ナルハ車ノ圓徑何尺人カナルハ何人
湯ノ沸シ方	蒸氣ナルハ水何石入焚火炭火
器械所	長何間横何間
製絲釜數	何百何十
口出シ人	自分コテ口ヲ出ストカ釜毎ニ一人ツ、何人トカニタ釜一人ツ、何人トカ
揚ケ返シ人	直揚ケニ付ナシトカ何十何人トカ
現業役員	教師何人檢査人何人絲結何人繭配何人トカ

官給全書

太政官布達之部

〇九十七

口出シ 箒

カルカヤノ根トカモロコシガラトカ舶來品トカ

大箋ノ寸法 何尺何寸廻リ

四百回「デール」 一號ハ十二トカ二號ハ幾ツ三號ハ幾ツ

坐繰製絲法即チ左ノ表面ノ如シ

工女ノ人員 八人トカ十人トカ但一家ニ集ル人数チ云

口出シ 箒 モロコシガラトカ竹箸チ代用トカ

揚ケ箋ノ寸法 何尺何寸廻リ

製絲計算此項ヘハ計算ニ係ルコトヲ記スヘシ

簡目	年度	十	五	年	十	六	年	十	七	年
元繭代一圓ニ付	何十何分取	全	上	全	上	全	上	全	上	全
使役男女ノ數	男 何人 女 何人	全	上	全	上	全	上	全	上	全
使役男女總計	男 何人 女 何人	全	上	全	上	全	上	全	上	全
一ヶ月ノ給料	男 何圓 女 何圓	全	上	全	上	全	上	全	上	全

一ヶ月ノ給料	一 何圓 二 何圓 三 何圓	全	上	全	上	全	上	全	上	全	上
生絲百斤ニ係	何百何拾圓	全	上	全	上	全	上	全	上	全	上
製造入費	何百何拾圓	全	上	全	上	全	上	全	上	全	上
新繭ヨリ新繭迄	何千何百斤	全	上	全	上	全	上	全	上	全	上
一ヶ月ノ製絲高	何百何拾圓	全	上	全	上	全	上	全	上	全	上
一週年就業ノ日數	何百何拾圓	全	上	全	上	全	上	全	上	全	上
賣上代價	何千何百圓	全	上	全	上	全	上	全	上	全	上
賣先	横濱カ桐生カ西京カ或ハ歐米直賣カ	全	上	全	上	全	上	全	上	全	上
製斗絲賣上代價	何百何拾圓	全	上	全	上	全	上	全	上	全	上

商標ナル者ハ一葉チ附シ差山スヘシ

業務沿革總說 附出品主履歷

（此項ヘハ開業ヨリ現今迄ノ沿革盛衰ヲ記スヘシ）譬ヘハ明治何年何月社中幾名相謀リ上州富岡ノ蒸氣機械或ハ奥州ニ本松ノ製絲器械ヲ撰シ水車ヲ用ヒ器械ヲ裝置ス當初ハ工人何名ニシテ其技業熟練ナラサリシカ何年某氏ノ教授ニ依リ大ニ進歩シ翌何年ハ百

斤ノ價格何程ニ販賣シ得ル線絲ヲ製スルニ至ル又何年何ノ誰發明ヲ以テ器械ヲ改修シ
 或ハ加巧シ一層便益ヲ得社中ノ利益月ヲ逐テ増加シ現社員何名ニ至ル尙明年ニ至リ何
 ヲノ目的ヲ以盛業ヲ圖ル云々又燃業ノ目的ハ社中某ノ資本ヲ專用シ以テ本業ヲ營マン
 ト謀リシニ何年何月某何々ノ事故ニ係リテ脱社シ或ハ何年ハ非常ノ發水コテ水車ノ運
 轉ヲ中止シ甚シキ損毛ヲ招キ困難ヲ極ムルニ際シ社中某ノ發發或ハ誰ノ助力ヲ以テ何
 年ニ至リ漸ク回復スルヲ得爾來云々又余カ家代々製絲ヲ以テ業トスル既ニ何年其間何
 世ニ於テ何々ノ發明ヲ爲シ大ニ業務ヲ擴張ス爾來何年ノ頃何々ノ事故ニ依テ一回衰狀
 ナ呈シ何年ニ至リ何々ノ方策或ハ勉勵ヲ以テ回復シ現今何々ノ景況云々又博覽會若ク
 ハ共進會ニ於テ褒賞ヲ受ケシ事アラハ併記スヘシ(以上ノ例文ニ準據シ文章ノ巧拙ニ拘ハラヌ成丈詳細ニ記スヘシ)
 前書解說ノ件々相違無之候也

年月日

出品主 何之誰印

前書之通相違無之依テ保証仕候也

何府下何國何郡何町 區長或ハ戶長

何之誰印 府縣委員 官 姓 名 印

(書式第四號)

第何區第何類

(用紙半紙)

出品解說

出品主 何府下何國何郡何町何番地族籍職業 何之誰

出 品 何品

數 量 何品ノ數量

代 價 賣價及ヒ原價(幾個以上ハ賣價幾割ヲ減スルノ類ハ其割合ヲモ記スヘシ)

產 地 府縣國郡區町村番地

工 場 地所建物ノ廣狹等(自宅コト製造シ別コ工場ヲ設ケサル者ハ本項ヲ省キテ可ナリ)

器 械 多寡大小馬力用法(等製作ノ地名人名及ヒ購入代價ノ明カナルモノハ之ヲ記スヘシ)

人 夫 職工ノ多寡男女及ヒ給料(等職工ノ外別ニ掛員等アラハ之ヲ記スヘシ)

原 料 種類產地及ヒ贈入代價等(精煉調和等ヲ要スルモノハ其手續ヲ記スヘシ)

官給證書

太政官布達之部

〇九十九

製	材	薪木石炭等ノ區別及ヒ其購入代價費消高等
製	法	製造上一切ノ手續(殊ニ製造ノ時間數量及ヒ原料使用ノ割合等ヲ詳カニ記スヘシ但秘法ハ記スルヲ要セス)
産	額	開業ノ時ヨリ出品ノ時迄毎年ノ製造高
販	路	賣捌先キノ地方及ヒ輸送額(外國へ輸出スルモノハ成ルヘク其輸出高ヲ記スヘシ)
傳	記	開業年月日及辛勞功績其他經歷沿革等(古人ト雖モ出品ニ對シテ功勞等アレ者ハ之ヲ記スヘシ)

前書解説ノ件々相違無之候也

年月日

出品主

何之誰印

前書ノ通相違無之依テ保証仕候也

何府下何國何區何町區長或ハ戶長

何之誰印

府縣委員官姓名印

○第三拾六號 十一月九日 農商務卿連名

官報ヲ購求シ更ニ郵便ニ差出ストキハ第三種郵便物ト爲シテ取扱ヒ其冊子ト爲シ又ハ

本紙ノ重量ニ超過シタル附録ハ第四種郵便物トナシ取扱フヘシ
右布達候事

○第三拾七號 十二月十二日 農商務卿連名

本年(十二月)第四十一號布告ヲ以テ追加相成候烟草印紙ノ儀ハ追テ發行相成候マテ現在ノ烟草印紙ヲ以テ取交相當ニ貼用スヘシ

右布達候事

○第三拾八號 十二月十八日 海軍卿連名

海軍志願兵徵募規則別冊ノ通之ヲ定ム

右布達候事

(別冊)

海軍志願兵徵募規則

第一條 海軍兵員タラシコトナ志願スル者ハ本則ニ照シテ之ヲ徵募ス但軍樂隊ハ別ニ規則ヲ設ク

第二條 志願兵ノ服役ヲ別ナク現役及ヒ豫備役トス現役年期卒ニ在テハ長期ヲ十個年短期ヲ七個年トシ准卒ニ在テハ總テ三個年トス

豫備役ハ現役長期ヲ終リシ者ヲシテ二個年間短期ヲ終リシ者ヲシテ五個年間之ニ服セシム 准卒ニ在テハ豫備役ナシ

第三條 卒ニ徵募スル者ハ年齢十七歳ヨリ二十五歳迄ノ者コシテ其職名ノ大別ハ左ノ如シ 水兵、火兵、職工、看病夫

第四條 准卒ニ徵募スル者ハ年齢十五歳ヨリ四十歳迄ノ者コシテ其職名ハ左ノ如シ 裁縫夫、造靴夫、守燈夫、剃夫

廚宰介及ヒ諸廚宰 割烹手介、割烹夫及ヒ諸割烹手 諸從僕及ヒ諸仕丁

第五條 卒ノ年齢ハ第三條ノ掲ケル如シト雖モ左ノ掲ケル者ハ出願スルコトヲ得

一 十五歳以上ニシテ体格強壯ナル者但十七歳ニ滿クサレハ服役年數ニ算入セス
二 三十五歳未滿ニシテ西洋形船舶或ハ造船所等ニ從事シ其技藝ニ熟達スル者

三 三十五歳未滿ニシテ府縣立商船學校ノ卒業證書ヲ所持スル者

四 前二項ノ者ハ直ニ下士ニ任スルコトアリ

第六條 水兵火夫ニ徵募スル者ノ身幹ハ五尺以上トス但十七歳未滿ノ者ハ四尺九寸以上トス

第七條 豫備役ニ入ル者ニハ其證書ヲ附與シ常ニ家居シテ產業ヲ營マシメ戰時或ハ事變ニ際シ之ヲ召集ス

第八條 卒ニシテ現役ヲ終リ尙一個年以上ノ再役ヲ出願スル者ハ之ヲ許可ス但現役十二年ニ滿ル者ハ豫備役ニ服セシメス

第九條 准卒ニシテ兵役ヲ終ル者ハ尙一個年以上ノ再役ヲ出願スルコトヲ得

第十條 現役中技藝ニ熟達シ行狀方正且才氣ノル者ハ之ヲ拔擢シテ下士ニ任ス

第十一條 現役中ハ食料被服ヲ官給シ且相當ノ日給ヲ與フ

第十二條 現役中ハ卒ノ家族アル者ニ限リ其扶助金トシテ一個月壹圓七拾五錢宛ヲ給ス其金額ハ每三個月ニ海軍省ヨリ各地方廳ヲ經テ其家族ニ下付スルモノトス

第十三條 服役年期中ハ現役豫備役ヲ論セス何等ノ事故アルモ免役出願ヲ許サス

第十四條 現役年期已ニ滿ル者ト雖モ戰事若クハ事變ノ際或ハ航海中ハ其期ヲ延スコトアル可シ此場合ニ於テハ其延期日數ヲ豫備役年期ヨリ除算ス

第十五條 徵募ノ地方及ヒ其人員等ハ徵募ヲ要スルトキ豫メ海軍卿ヨリ其地方廳ニ達ス可シ但准卒ハ臨時鎮守府或ハ艦船營ヨリ徵募スルモノトス

第十六條 地方廳ハ其達書ニ記載スル日限迄ニ本籍寄留ノ別ナク志願人ヲ調査シ其人員ヲ鎮守府ニ通牒ス可シ

第十七條 志願人ハ父兄其他親族或ハ後見人ヲ以テ身元引受人ト爲ス可シ然レトモ居住ノ地ニ親族或ハ後見人ナキトキハ其地ニ本籍アリ身元正確ナル者ヲ以テ之ニ充ルコトヲ得

第十八條 身元引受人ハ第一號書式ノ願書ニ志願人ノ履歷書ヲ添ヘ管轄地方廳ニ差出シ該廳ハ其願書正副共ニ巡回募兵使ニ出ス可シ但准卒ハ身元引受人ヨリ直ニ鎮守府或ハ艦船營ニ出ス可シ

第十九條 左ニ掲グル者ハ兵役ヲ出願スルコトヲ許サス

刑事被告人ト爲リ裁判未決ノ者

公權停止中ノ者

重罪ノ刑ニ處セラレタル者

第二十條 募兵官員及ヒ其職務ハ左ノ如シ

募兵使

海軍佐官或ハ大尉ヲ以テ之ニ充ツ府縣ニ派出シテ兵員徵募ノ事務ヲ掌ル

募兵副使

海軍尉官ヲ以テ之ニ充ツ募兵使ヲ補助スル事ヲ掌ル但時宜ニ因リ之ヲ欠クコト有

募兵醫官

海軍軍醫ヲ以テ之ニ充ツ募兵使ニ從ヒ志願人ノ身軀體格ヲ検査スル事ヲ掌ル

募兵書記

海軍下士或ハ十等以下ノ軍屬ヲ以テ之ニ充ツ募兵使ニ從ヒ諸記録ノ事ヲ掌ル

第二十一條 地方長官ハ屬官ヲシテ管内兵員徵募ノ事務ヲ補助セシム可シ

第二十二條 郡區長及ヒ戶長ハ其郡區町村內兵員徵募ニ關スル事ヲ掌ル可シ

第二十三條 募兵使ハ府縣屬官及ヒ郡區長ト商議シ豫メ檢査ノ場所及ヒ日割人員等ヲ定メ戶長ヲ經テ志願人ニ出頭ヲ命ス可シ

第二十四條 志願人ノ檢査ハ府縣屬官或ハ郡區長ノ立會ヲ要ス但郡區長事故アルトキハ其書記ヲシテ代理セシムルコトヲ得

第二十五條 檢査合格ノ者ヨリ募兵使ヨリ立會ノ府縣屬官或ハ郡區長ヲシテ第二號書式ノ採用証書ヲ附與セシム

第二十六條 檢査合格ノ者ニ採用証書ヲ附與シタルトキハ戶長ヨリ第三號書式ノ本人戶籍明細書ヲ出サシム其用紙ハ募兵使ヨリ下付ス

第二十七條 寄留地ニ於テ採用スル者ハ募兵使ヨリ其旨本籍ノ地方廳ニ通知シ該廳ハ本人所管ノ戶長ヲシテ第二十六條ニ掲グル戶籍明細書ヲ出サシメ募兵使或ハ鎮守府ニ送附ス可シ

第二十八條 採用ノ兵員ハ募兵使携帶ノ誓約簿ニ各自記名捺印ス可シ

第二十九條 合格ノ者所要ノ人員ニ超過スルトキハ抽籤法ヲ以テ當籤者ヲ採用ス

第三十條 抽籤ハ各自ニ之ヲ行ハシムルモノトス但便宜ニ因リ一名乃至三名ヲ抽籤總代ト爲スコトヲ得

第三十一條 檢査呼出ニ際シ病氣或ハ父母ノ重病等ノ爲メ一時出頭ニ難キ者或ハ之カ爲メ願書却下ヲ請フ者ハ其事實ヲ詳記シ戶長ノ證印ヲ受ケ郡區長ヲ經テ募兵使ニ申出其處分ヲ受ク可シ

第三十二條 徵募ノ兵員各地發程ノ期限ハ募兵使ヨリ達ス可シ府縣屬官或ハ郡區長ハ府縣或ハ郡區毎ニ其兵員ヲ便宜ノ場所ニ集合セシメ其內一名若クハ二名ヲ取締ト爲テ同時ニ發程セシム可シ

第三十三條 疾病其他已ムヲ得サル事故コト發程ニ難キ者ハ其事實ヲ詳記シ(疾病者ハ醫師ノ診斷書ヲ添フ)戶長ノ證印ヲ受郡區長ヲ經テ募兵使或ハ鎮守府ニ届出可シ

第三十四條 徵募ノ兵員各自居住ノ地ヨリ入營迄ノ旅費ハ官給トス檢査ノ場所ニ往復

並ニ滞在等ノ費用ハ總テ自辨タル可シ

第三十五條 現役中公務ニ因リ傷疾疾病ヲ受ケ兵役ニ堪ヘ難キ者ハ海軍恩給令ニ照準シテ相當ノ恩給ヲ與フ

第三十六條 現役中傷疾疾病ニ罹ル者ハ海軍病院ニ入治療セシメ若シ兵役ニ堪ヘ難キ者ハ免役ノ上旅費ヲ給シ歸郷セシム但服役實期十一年以上ノ者ハ第三十五條ニ同シ

第三十七條 現役中父母ノ重病或ハ一家ノ安危ニ係ル等非常ノ事故アリ一時已ムテ得ムシテ父母又ハ親族等ヨリ其實情ヲ詳記シ(疾病ハ醫師ノ診斷書ヲ添フ)郡區長ノ與書証印ヲ受ケ本人ノ所轄廳ニ願出ルトキハ詮議ノ上往復ヲ除キ二週日以内ノ歸省ヲ許ス其旅費ハ自辨タル可シ但二等若水兵若火夫ハ本文ノ限ニ在ラス

第三十八條 現役中其職務勉勵ノ者ニハ滿三年毎ニ慰勞金ヲ下賜ス但其現金ハ免役再役退役若クハ下士ニ昇級ノトキ下附ス

第一號書式(用紙美濃紙)

海軍兵員願

何府何國何郡何町何番地 寄留者ハ寄留地モ
何縣何國何區何村 明細ニ記ス可シ

華士族平民

何某男或ハ弟又ハ何々

何 某

何年何月何日於何國
何(郡區)何(町村)生

年齡何年何月何年何ヶ月

右ノ者何個年期海軍水兵(火夫或ハ何々)志願ニ付御檢査ノ上御採用相成候様其筋ニ御申立被下度此段奉願候也

何府何國何郡何町何番地

華士族平民

右何某父或ハ兄又ハ何々

身元引受人 何 某 印

右戸長

何 某 印

年月日

前書之通相違無之候也

何府知事 何某殿
何縣令 何某殿

官令徑書

太政官布達之部

〇百四

前書願出ニ付本人檢査ノ上御取捨有之度候也

年月日

海軍募兵使
御中

何府知事
何縣令
何
某印

第二號書式

何府何國何郡何町何番地
何縣何國何區何村何番地

華士族平民

何某男或ハ弟又ハ何々

何
某

右何個年期ヲ以テ海軍水兵(或ハ何々)ニ採用候事

海軍募兵使

年月日

海軍何官某印

第三號書式

戶籍明細書

本管族籍氏名(肩書)戸主カ二三男カ養子カ明記スヘシ)

出生ノ年月日

生國地名

本籍住所

寄留住所(全戸カ單身カ明記スヘシ)

宗門(神葬ハ神道ト記スヘシ)

家族人名及其誕辰(父母妻子兄弟等全戸ノ者總テ之ヲ記ス
但父母ノ實養ヲ詳ニス可シ)

父 氏名
何年何月何日生 母

兄 氏名
同上 弟

氏名
同上

姉 氏名
何年何月何日生 妹

其他右ニ準ス
同上

前書之通相違無之候也

年月日

右戸長 何 某印

○第三拾九號 十二月廿五日

農商務卿連名

官給徑書

太政官布達之部

〇百五

明治十六年(六月)第拾八號布達ヲ以テ改定烟草稅則施行前既ニ裝置セシ製造烟草ハ本年限リ其裝置ノ儘賣捌クコトヲ得セシメ候處烟草營業人ニシテ右烟草販賣殘餘ヲ所持モノハ明治十七年六月三十日ヲ限リ尙ホ賣捌クコトヲ得スル右布達候事

○第四十號 十二月廿八日 大藏卿連名

本年(本月)第四十一號ヲ以テ烟草稅則中追加ノ儀布告候コ付テハ該印紙別紙見本ノ通相定ス (見本零ニ)

右布達候事

○第四十一號 十二月廿八日 大藏卿連名

明治十五年(九月)第十八號同年(十二月)第貳十五號及ヒ本年(五月)第十一號布達長野縣下飯山第二十四大坂府下大坂第百二十六及ヒ福島縣下須賀川第百八ノ三國立銀行發行紙幣引換期限ノ義今般更ニ明治十八年十二月三十一日迄延期ス

右布達候事

○第四十號 十二月廿八日 大藏卿連名

今般大坂府下大坂第二十六國立銀行領店申付候ニ付其發行紙幣自今通用不相成候因テ右紙幣引換方ノ儀ハ總テ大藏省ニ於テ負擔シ國立銀行大藏省爲換方及ヒ國庫金取扱所ヲシテ取扱ハセ候條右紙幣所持主ハ來ル明治十八年十二月三十一日限り國立銀行大藏省爲換方又ハ國庫金取扱所へ申出引換ヲ請フヘシ若シ期限ヲ過キ申出ル者ハ如何ナル事情アルモ一切引換サルヘシ

右布達候事

明治十六年 官令全書

○太政官御達之部

○第壹號 一月四日 官省院廳府縣

叙勳條例別冊ノ通相定候條此旨相達候事

叙勳條例

第一條 叙勳條例ハ文武官ノ勳勞アル者ヲ叙シ及ヒ進級セシムルノ例ナリ

但臨時勳功ニ依テ叙スルハ本例ノ限ニアラス

第二條 文武官數年勳勞アルモノハ其成績ヲ勘査シ左表ニ照シテ勳等ニ叙ス其初叙勳任官ハ勳三等奉任官ハ勳六等判任官以下ハ勳八等ヨリス尙ホ勳勞年數ヲ累サヌルニ由リ進級スルコトヲ得然レハ判任官ハ十四等官並十四等相當官以下ハ勳六等ニ進ムヲ得ス奉任官ハ七等官並七等相當官以下ハ勳三等ニ進ムヲ得ス勅任官ハ三等官並三等相當官ハ勳一等ニ進ムヲ得ス

大臣參議諸省卿參事院元老院議長陸海軍大將ノ勳一等ニ叙スルハ進級年例ノ限リニ

アラヌ

陸海軍下士ノ初叙ハ滿十年以上トス

初叙并ニ進級例

勳一 等勳	勳二 等勳	勳三 等勳	勳四 等勳	勳五 等勳	勳六 等勳	勳七 等勳	勳八 等勳
進 上	進 上	初叙 上	進 上	進 上	初叙 上	進 上	初叙 上
滿十年以上	滿五年以上	滿五年以上	滿七年以上	滿五年以上	滿五年以上	滿七年以上	滿六年以上
奏 任							
判任以下							

第三條 臨時勳功若クハ特旨ニ依テ叙セラレタル者モ本例ニ依リ進級セシム
年金ヲ受領スルモノハ別段ノ恩命アルニ非サレハ引續キ前級ノ年金ヲ賜フ

第四條 四等以下ノ勳章ヲ有スルモノ勅任官トナリ七等以下ノ勳章ヲ有スルモノ奏任官トナリタル時ハ進級年數ノ五分一以上ロシテ勳三等又ハ勳六等迄進スルヲ得

第五條 文武官ノ勳等ニ叙スヘキ勳勞者アル時ハ各廳ニ於テ本人ノ履歷明細書ヲ作リ其長官ノ證認狀ヲ副ヘ毎年一月又ハ八月限リ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ

但地方官ノ叙勳スヘキ者ハ内務卿ヨリ之ヲ申牒スヘシ

第六條 賞勳局總裁ハ各廳ノ申牒ヲ檢閲審査シ議定官ノ會議ヲ開キ其當否ヲ論定シ以テ上奏ス

第七條 勳章授與式ハ毎年四月十一月ノ二回ニ執行ス(但臨時叙勳ハ此限ニアラス

○第貳號 一月廿三日 府縣(札幌根室沖繩ノ三縣)ヲ除ク

陸海軍兵事ニ關スル事務取扱ノ爲メ自今兵事課ヲ置キ俸給トシテ年額金六百圓増加俸條判任官適宜増員可致此旨相違候事 但本年度ノ儀ハ日割ヲ以テ大藏省ヨリ可受取事

○第三號 一月廿四日 官省院廳府縣

明治十一年(三月)第十號達第一項ヘ左ノ通但書ヲ追加候條此旨相違候事

但書後軍艦員並ニ退職或ハ罷役ニシテ文官ニ任スル者ハ其官ノ禮服ヲ著用スルモ妨ケナシ

○第四號 一月廿五日 官省院廳府縣

沖繩縣人民ニ限リ徒刑流刑ニ處セラレタル者ハ同縣下八重島ニ發配スルヲ得ヘシ此旨相達候事 但囚人取扱方舊慣ニ因リ沖繩縣令之ヲ管現スヘシ

○第五號 一月廿六日 官省院廳府縣

長崎縣對馬國下縣郡嚴原村ニ同縣支廳設世候條此旨相達候事

○第六號 二月十日 官省院廳府縣

大嶽卿松方正義ヨリ明治十年度歳入出決算報告書ヲ上呈ス乃チ會計検査官ニ於テ其計算ヲ審査セシメ其確實ナルヲ証認ス爲心得此旨相達候事 (報告書略ス)

○第七號 二月十三日 官省廳府縣

官武々記及職記式改定ノ儀別紙ノ通陸海軍兩省ニ相達候條此旨相達候事

各通 陸軍省 海軍省

武官々記及職記式別紙ノ通改定候條此旨相達候事

但從前文官ヲ兼任スル武官ノ官記及現役武官ノ職記ハ總テ改定ノ式ニ準據スヘキ儀

ト心得ヘシ (別紙略ス)

○第八號 二月十四日 警視廳府縣 沖繩(函館)札幌根室ヲ除

明治十四年(四月)第三十號達左ノ通改正候條此旨相達候事

傳染病ニ罹リタル者身元亦貧ニシテ資力ナキトキハ本籍寄留旅行ヲ問ハズ其費ハ總テ發病地ノ地方稅中衛生費ヲ以テ支辨スヘシ

但流行ノ勢盛ナルトキハ時宜ニ依リ官費支給スルコトアルヘシ

○第九號 二月十六日 官省院廳府縣

明治九年(三月)第三拾號明治十三年(四月)第二十八號達廢止候條此旨相達候事

○第十號 二月廿一日 府 縣

明治十一年(七月)三十二號達府縣官職制中郡長ノ條項第一左ノ通改正候條此旨相達候事

郡長(八等相當)一人 但特別ノ詮議ヲ以テ委任トナスヲ得

第一郡長ノ俸給左ノ如シ

○第四號 一月廿五日 官省院廳府縣

沖繩縣人民ノ限リ徒刑流刑ニ處セラレタル者ハ同縣下八重島ニ發配スルヲ得ヘシ此旨相達候事 但囚人取扱方舊慣ニ因リ沖繩縣令之ヲ管現スヘシ

○第五號 一月廿六日 官省院廳府縣

長崎縣對馬國下縣郡嚴原村へ同縣支廳設置候條此旨相達候事

○第六號 二月十日 官省院廳府縣

大藏卿松方正義ヨリ明治十年度歳入出決算報告書ヲ上呈ス乃チ會計検査官ニ於テ其計算ヲ審査セシメ其確實ナルコトヲ証認ス爲心得此旨相達候事 (報告書略ス)

○第七號 二月十三日 官省廳府縣

官武々記及職記式改定ノ儀別紙ノ通陸海軍兩省へ相達候條此旨相達候事

各通 陸軍省 海軍省

武官々記及職記式別紙ノ通改定候條此旨相達候事

但從前文官ヲ兼任スル武官ノ官記及現役武官ノ職記ハ總テ改定ノ式ニ準據スヘキ儀

ト心得ヘシ (別紙略ス)

○第八號 二月十四日 警視廳府縣 沖繩函館札幌根室ヲ除

明治十四年(四月)第三十號達左ノ通改正候條此旨相達候事

傳染病ニ罹リタル者身元亦貧ニシテ資力ナキトキハ本籍寄留旅行ヲ問ハズ其費ハ總テ發病地ノ地方稅中衛生費ヲ以テ支辨スヘシ

但流行ノ勢盛ナルトキハ時宜ニ依リ官費支給スルコトアルヘシ

○第九號 二月十六日 官省院廳府縣

明治九年(三月)第三拾號明治十三年(四月)第二十八號達廢止候條此旨相達候事

○第十號 二月廿一日 府 縣

明治十一年(七月)三十二號達府縣官職制中郡長ノ條項第一左ノ通改正候條此旨相達候事

郡長(八等相當)一人 但特別ノ詮議ヲ以テ委任トナスヲ得

第一郡長ノ俸給左ノ如シ

一等給 八十圓 二等給 七十圓 三等給 六十圓 四等給 五十圓 五等給 四十五圓 六等給 四十圓 七等給 三十五圓 八等給 三十圓

○第拾壹號 二月廿八日 府 縣

明治十四年(八月)第七拾五號達別紙中左ノ通追加候條此旨相達候事

追加 函館出張所 函館縣 札幌縣 根室縣

○第拾貳號 三月三日 官省院廳府縣

福岡縣下筑後國三池郡下里村へ已決監ヲ設置シ三池集治監ト名稱候條此旨相達候事

○第拾三號 三月十五日 官省院廳府縣

農商務省中技術等給并月給別表ノ通相定候條此旨相達候事

四等	五等	六等	七等	八等	九等	十等
大技長	權大技長	少技長	權少技長	一等技手	二等技手	三等技手
三百五十圓	三百圓	二百五十圓	二百圓	六十圓	五十圓	四十五圓
二級 三百圓	二百五十圓	二百圓	一百五十圓	百五十圓	百二十圓	百圓迄

三級	二百五十圓	二百圓	百七十一圓	百廿五圓
四級	十圓	百五十圓	百圓	

十一等	十二等	十三等	十四等	十五等	十六等	十七等	外
四等技手	五等技手	六等技手	七等技手	八等技手	九等技手	十等技手	技生
四十圓	卅五圓	卅圓	廿五圓	廿圓	十五圓	十二圓	六圓
九十圓	八十圓	七十圓	六十圓	五十圓	四十圓	卅圓迄	廿五圓

○第拾四號 三月十九日 官省院廳府縣

長崎縣嚴原支廳ニ支廳長ヲ置キ縣令代理ノ任ヲ以テ其委任スル所ノ條款ニ依リ部内ノ行政事務ヲ總理セシム

右相達候事

○第拾五號 三月廿二日 官省院廳府縣

官令全書

太政官達之部

○百十

國庫出納條規別冊ノ通相定候條此旨相達候事

國庫出納條規

- 第一條 國庫ハ大藏卿所管ノ金錢ヲ藏置スル所トス
- 第二條 常用準備ノ出納ハ大藏卿收支ノ傳票ヲ發シ出納局長ヲシテ執行セシム
- 第三條 大藏卿ノ傳票ハ番號ヲ附シ其番號ハ各廳會計上通シテ用ユルモノトス
- 第四條 大藏省ハ便宜ニヨリ各地ニ出納局出張所又ハ大藏省爲換方ヲ設置シ金錢ノ出納ヲ爲サシム其方法ハ大藏卿之ヲ定ム
- 第五條 收入金ノ受取証書ハ其納主ニ對シ出納局長之レヲ發シ支出金ノ受取証書ハ出納局長ニ宛テ其受取主ヨリ差出サシム以テ收支ヲ了シタル証トス
- 第六條 收入スヘキ現金ハ出納局及ヒ同局出張所又ハ大藏省爲換方ニ於テ預リ納主ニ預リ証書ヲ交附シ納主ヨリ該預証書ヲ以テ納付ノ手續ヲナサシム
- 第七條 大藏卿ハ國庫金錢管主ノ方法及ヒ之ヲ各廳ニ委託スル方法ヲ定ム
- 第八條 大藏卿ハ出納局ニ命ジ常ニ金錢ノ種類ヲ區別シ置キ一週間毎ニ現在高ク太政

官ニ報告スヘキ

第九條 大藏卿ハ毎月末若干日ヲ剩シ收支ノ傳票ヲ停止スルヲ得

○第拾六號 三月廿四日 府 縣

明治十年(十一月)第拾七號布告第一條但書ノ場合ニ於テハ債主ニ其未納稅アル旨ヲ通告シ債主之ヲ辨納セサル時ニ公賣ヲ行フヘキ儀ト可心得此旨相達候事

○第拾七號 三月廿六日 官省院廳府縣

本年第壹號布告ノ旨ニ依リ金銀木杯又ハ金圓賜與手續別紙ノ通相定候條此旨相達候事
金銀木杯金圓賜與手續

第一條 褒章ヲ賜フヘキ者ニ金銀木杯又ハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ併セ賜フトキハ其等差左ノ如シ

定例

- 第一等 木杯三組(品格ヲ三等ニ分ツ)又ハ金拾圓ヨリ多カラス六圓ヨリ少カラス
- 第二等 木杯三組(品格ヲ三等ニ分ツ)又ハ金五圓ヨリ多カラス貳圓五拾錢ヨリ少カ

ヲス

第三等 木杯壹個(品格ヲ三等ニ分ツ)又ハ金貳圓ヨリ多カラズ壹圓ヨリ少カラズ
但賜杯賜金ニ及ハサルモノハ褒狀ヲ與フルコトアルヘシ

特例

第一等 金杯壹個又ハ三組又ハ金圓

第二等 銀杯壹個又ハ三組又ハ金圓

第二條 公益ノ爲メニ金穀財産等ヲ寄附シタル者ニ金銀木杯ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ併
セ賜フトキハ其等差左支ノ如シ

寄附金額又ハ價格

拾圓未滿

褒狀

拾圓以上百圓未滿

木杯壹個

但五拾圓未滿ハ拾圓毎ニ五拾圓以上ハ貳拾五圓毎ニ品格ニ等差アリ

百圓以上五百圓未滿

木杯三組

但三百圓未滿ハ五拾圓毎ニ三百圓以上ハ百圓毎ニ品格ニ等差アリ

五百圓以上貳千圓未滿

銀杯壹個

但千圓未滿ハ貳百五拾圓毎ニ千圓以上ハ五百圓毎ニ品格ニ等差アリ

貳千圓以上五千圓未滿

銀杯三組

但千圓毎ニ品格ニ等差アリ

五千圓以上壹萬圓未滿

金杯壹個

但貳千五百圓毎ニ品格ニ等差アリ

壹萬圓以上

金杯三組

第三條 金銀杯又ハ特例金圓又ハ褒章ト金銀木杯又ハ金圓ヲ併セ賜フ事項ハ賞勳局總
裁之ヲ管理スルモノトス

褒狀又ハ木杯又ハ定例金圓ノミヲ賜フハ警視總監府知事縣令管理施行スルモノトス
但勅奏任官并從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニ賜ウヘキトキハ第四
條ニ準據スヘシ

第四條 金銀杯又ハ特例金圓又ハ褒章ト金銀木杯又ハ金圓ヲ併セ等フヘキ者アルトキハ警視總監府知事縣令ヨリ内務卿又ハ農商務卿ニ具申シ内務卿又ハ農商務卿ハ之ヲ審査シ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ

賞勳局總裁ハ其申牒ニ據テ勅任官并從六位以上及ヒ勳六位以上ノ者及華族ノ戶主コハテ直授シ其他ノ者ハ内務卿又ハ農商務卿ヲ經由シ警視總監府知事縣令ヲシテ之ヲ傳達セシム

第五條 金銀木杯又ハ金圓又ハ褒狀ヲ受クヘキ者ニシテ其未ダ授與セサル前重罪ノ刑ニ處セシメラルルキハ之ヲ授與セズ

○第拾八號 四月七日 官省院廳府縣

地方巡察條規左之通相定候條此旨相達候事

地方巡察條規

第一條 行政官吏服務紀律第十二條ニ從ヒ臨時巡察使ヲ地方ニ派遣スヘシ

第二條 巡察使ハ勅任官中ヨリ臨時選テ以テ之ニ充ツ

第三條 全國ヲ五部ニ分テ各部巡察使ヲ派遣スヘシ

第四條 巡察使ハ法律規則ハ實施行政事務ノ舉否利弊ヲ檢査シ官吏服務紀律ニ照シテ功過ヲ檢シ并ニ治蹟ヲ察スルヲ以テ務トス

第五條 巡察使ハ各官署ニ臨シ主任官ニ就テ事務ノ狀況ヲ訪問シ其簿冊文書等ヲ檢スルコトアルヘシ直ニ其行政處分ニ干預スルコトヲ得ス

第六條 巡察使鎮臺鎮守府又ハ營所アル地方ニ到ルトキハ事宜ニヨリ行政事務ト軍務トノ關係ニ付事狀如何ヲ訪問スルコトアルヘシ

第七條 巡察使ハ其巡察檢視スル所ノ事狀ヲ具ヘ太政官ニ上申スルヲ以テ其職ヲ終ル者トス

○第拾九號 四月十六日 官省院廳府縣

皇居御造營ニ付諸獻納願ノ儀内務省ニ於テ管理候處自今宮内省管理ニ被仰附候條此旨相達候事

○第貳拾號 五月二日 官省院廳府縣

第一

省院廳府縣裁判所警察署

參謀本部監軍本部近衛局鎮臺營所鎮守府憲兵本部及屯署

官立學校

第二

上長官以上ノ武官奏任以上ノ文官及郡區長

官報

一 詔勅 二 賞勳 三 叙任 四 官令 布告 布達

五 達公示ヲ妨ケサル官省院廳府縣及東京府ノ達

六 告示官省院廳及東京ノ告示 七 官廳廣告

八 雜件 行幸行啓觀禮 參事院回答并審理 諸官廳伺指令 軍艦出入

官吏轉職出入等 雜事

九 外報 公使領事報告 外國新聞抄譯

十 說明正誤 十一 學藝教育ニ關スル事項 十二 農工商業及山林ニ關スル事項

十三 統計報告 十四 氣象報告 十五 汽船出入 十六 廣告

官報定價

一 壹部定價(配達遞送費トモ) 金三錢

○第貳拾三號 五月二十二日 官省院廳府縣

今般官報發行候ニ付從前官省院廳ノ達併ニ告示ノ儀ハ官報ニ登載スルヲ以テ公式トシ別ニ達書又ハ告示書ヲ發付スルニ不及候但内達ノ類ハ從前ノ通可相心得此旨相達候事

○第貳拾四號 五月廿九日 府 縣

大瀨省租稅局福井出張所ヲ石川縣下金澤ニ移シ金澤出張所ト改稱並盛岡青森兩出張所ヲ廣シ明治十四年(八月)第七拾五號達別紙收稅區並中ニ左ノ縣々追加候條此旨相達候事

金澤出張所 富山縣 長崎出張所 佐賀縣 鹿兒島出張所 宮崎縣 仙臺出

張所 岩手縣 函館出張所 青森縣

○第貳拾五號 六月二日 官省院廳府縣

明治十四年(四月)第三十四號達歲入科目ノ内左ノ通追加候條此旨相達候事

酒造稅中造石ノ次へ 自家用料酒鑑札料

會社稅中株式取引所稅ノ次へ 米商會所仲買人稅 株式取引所仲買人稅

○第貳拾六號 六月五日 官省院廳府縣

明治十六年度歲入出豫算ノ儀別冊ノ通決定候條此旨相達候事 (別冊之譽)

○第貳拾七號 六月廿二日 官省院廳府縣

官報本年七月一日ヨリ發行候條此旨相達候事

○第貳拾八號 六月廿三日 府 縣

租稅ノ儀他ノ事務ト混同處理候地方モ有之趣石ハ最モ緻密周到畫一ノ整理ヲ要スル事
務ニ付自今必ス一課ヲ設ケ專ラ該事務ニ從事セヨムヘシ此旨相達候事

○第貳拾九號 六月廿九日 官省院廳府縣

本年(五月)第貳拾貳號達中官報ニ記載スヘキ事項ハ其條目ヲ示スモノニ付實際施行

臨ニ其欄次節目ハ總テ文書局長ノ斟酌ニ任ス此旨相達候事

○第三拾號 八月一日 官省院廳府縣

明治六年(十一月)第三百九拾三號達廢止候條此旨相達候事

○第三拾壹號 八月三日 官省院廳府縣

官有地第二種官用地ハ人民ニ使用ヲ許シタルモノヲ除クノ外其所在區町村協議費ノ賦課ニ應セザル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

但道路疏水等ノ爲メ該區町村手當金ヲ給與スルハ各廳ノ適宜タルヘシ

○第三拾貳號 八月三日 官省院局

自今各廳ニ於テ外國人ヲ備入レ及ヒ備繼メハ其給料等ヲ増加セントスル時ハ豫メ伺出解備メハ給料等ヲ減省スルモノハ其都度届出ヘシ此旨相達候事

但警視廳及ヒ府縣ノ分ハ主管ノ上司ヨリ伺出ヘシ

○第三拾三號 八月四日 府 縣

明治十年(十一月)第七拾九號布告第二條第二項ノ場合ニ於テ其酒類及器械本人ノ所有

ニ非サル片ハ所有主ニ通告シ所分スルハ本年(三月)第拾六號達ノ通可心得此旨相達候事

○第三拾四號 八月廿三日 官省院廳府縣

官用ノ船舶ヲ製造又ハ變換(汽船ヲ帆船ニ變ヘ又ハ檣數ヲ増減スル類)若クハ購求シタルトキハ別紙第一號及ヒ第二號表ニ照シ毎年一月一日調テ以テ其年三月三十一日限リ海軍省ニ報告スヘシ此旨相達候事

(別紙)

第壹號

西洋形船舶表 官省院廳府縣

船名	何
船質	木製カ 鐵製カ
船長	府何(縣)何國何郡(區)何町(村)何番地 寄留者ハ寄留地方ヲ記ス 何府(縣)華(士)族(平民) 何 某

製造ノ年及地名	何年何月何所ニ於テ製造
長	量噸甲板最大ノ長サ 何丈何尺何寸
幅	内法リ最大ノ幅 同
深	艙室ニ於テ量噸甲板ヨリ船底中央ノ内板ニ至ル深サ 同
載貨喫水	船首 何尺何寸 船尾 何尺何寸
登簿噸數	何千何百何拾何噸
甲板數	何層
檣數	何本 裝帆種類「バーク」カ「ブーク」カ「スクーネル」カ
機關種類	横置カ 縦置カ 斜置カ 單機關カ 複機關カ 高壓カ 低壓カ
汽機ノ形狀及ヒ筒數	角カ 圓カ 何個カ
馬力	名何千何百何拾何馬力 實何千何百何拾何馬力

千三百石以上		拾六間以上
千四百石未滿		拾七間以上
千四百石以上		拾八間未滿
千五百石未滿		拾八間以上
千五百石以上		拾九間未滿
千六百石未滿		拾九間以上
千六百石以上		拾九間未滿
千七百石未滿		拾九間以上
千七百石以上		拾九間未滿
千八百石未滿		拾九間以上
千八百石以上		拾九間未滿
千九百石未滿		拾九間以上
千九百石以上		拾九間未滿
千石未滿		拾九間以上
千石以上		拾九間未滿

○第三拾五號 八月廿四日 官省院廳府縣

海軍省中教官ヲ置キ其名稱等級俸給別表ノ通相定候條此旨相達候事
(別表)

海軍教官等級并俸給表

四等	一等教官	四等	任
五等	二等教官	五等	任
六等	三等教官	六等	任
七等	四等教官	七等	任
八等	五等教官	八等	任
九等	六等教官	九等	任
一等	一等俸 貳百五拾圓	一等俸 貳百圓	一等俸 百圓
二等	二等俸 貳百三拾圓	二等俸 百八拾圓	二等俸 百三拾圓
三等	三等俸 貳百拾圓	三等俸 百六拾圓	三等俸 百拾圓
			八拾圓
			五拾五圓
			四拾圓
			四拾五圓
			五拾圓
			四拾五圓

○第三拾六號 八月三十一日 官省院廳府縣

本年(五月)第貳拾號達内務省技術等級并月給表(左ノ通但書追加 (原達訂正)

○第三拾七號 九月十一日 官省院廳府縣

陸軍恩給令別冊ノ通改正候條此旨相達候事 但陸軍罷役俸并恤金令ヲ廢止ス

別冊

陸軍恩給令

官令三三三

太政官達之部

○百廿一

陸軍恩給令目錄

第一章 總則 第二章 恩給及ヒ増加 第三章 寡婦(孤兒)扶助料
 第四章 服役年算則 第五章 從軍年算則 第六章 恩給支陸順序
 第七章 賑恤金 第八章 給助金
 陸軍恩給令

第一章 總則

第一條 陸軍恩給軍陸軍諸種ノ勤勞ニ依テ之ヲ給スル者ナリ其種類別テ左ノ五項トス

- 一 退職恩給
- 二 免除恩給
- 三 寡婦(孤兒)扶助料
- 四 賑恤金
- 五 給助金

第二條 退職恩給免除寡婦恩給扶助料ハ本人ノ終身孤兒扶助料ハ男女共ニ二十歳ニ至迄之ヲ給メ賑恤金給助金ハ一時限リ之ヲ給ス

第三條 軍人ハ定限ノ年齢ニ達スノハ現役ヲ辭シテ恩給ヲ受クルヲ例トス其定限左ノ如シ

會計監督 軍醫監 藥劑監

六十

憲兵大中佐 會計副監督 軍醫正 藥劑正 馬醫監

五十七

步騎砲工輜重兵大中佐 憲兵少佐 會計監督補 會計一等軍吏
一等軍醫 一等劑官 一等馬醫

五十四

步騎砲工輜重兵少佐 憲兵大尉 會計二等軍吏 二等軍醫 二等劑官 二等馬醫 砲工兵上等監護

五十一

步騎砲工輜重兵大尉 憲兵中少尉 會計三等軍吏 三等軍醫三等劑官 三等馬醫 軍樂長 砲工兵監護 砲兵監守 砲兵監査 諸工長 諸工下長

四十八

步騎砲工輜重兵中少尉 憲兵下士 會計書記 監護長 馬醫生 軍樂次長 軍樂手

四十五

步騎砲工輜重兵下士 憲兵卒 會計卒 看病卒 樂生

四十

步騎砲工輜重兵卒

三十五

第四條 軍人定限ノ年齢ニ達スト雖モ前途尙ホ任用ニ堪ヘ若クハ材能特拔又ハ老練者ヲ要スル職務ニ在ル者ハ仍ホ留任ヲ命スルヲ得但強テ現役ヲ辭スル者ハ此限コフラス

第五條 上長官士官准士官未タ定限ノ年齢ニ達セスト雖モ服役實期十一年以上ノ者ニ

シテ服役ニ堪ヘサルヲ認めタル時ハ士官以上ハ陸軍卿准士官ハ其所管長官旨ヲ諭シ
テ現役ヲ退キ恩給ヲ願ハシムルコトアル可シ

第六條 恩給ハ公權剝奪ノ時ハ全ク之ヲ止メ左ノ各項ニ該ル時ハ其時間ノミ之ヲ停止
一 公權停止ノ時 二 事故アリテ日本人タルノ分限ヲ失フ時

三 政府ノ許可ナクシテ日本國外ニ出タル時

第七條 恩給ヲ受ケタル者再ヒ現役ニ就キ若クハ文官ニ任シ俸給ヲ受クル時ハ其間該
恩給ヲ停止ス但其負傷増加恩給ハ仍ホ之ヲ給ス

第八條 寡婦(孤兒)扶助料ハ當該軍人死歿ノ日(戰地等ニテ死歿ノ者ハ陸軍官憲ヨリ
報告ノ日)ヨリ一箇年間願出サル者ハ其權利消絶ス

恩給及ヒ扶助料ハ一箇年以上其金額ノ受領ヲ怠ル時ハ其怠リタル年間ノ金額ハ之ヲ
給セス

第九條 恩給及ヒ扶助料ノ金額計算ニ就キ違算アリト思惟スル時ハ初メテ金圓ヲ受領
セシ日ヨリ三箇月以内ニ管轄地方廳ヲ經テ陸軍卿ニ上申ス可シ若シ此期限ヲ過クル

時ハ之ヲ受理セス

第二章 恩給及ヒ増加

第十條 退職恩給ハ准士官以上服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ又ハ疾病
ニ罹リ査問會議ノ處決若クハ陸軍卿ノ諭旨ニ依リ退職スル者ニ之ヲ給ス

戰鬪及ヒ戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メニ傷疾ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ或ハ之ヲ
失フコト等シト認めル者又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ健康ニ有害ナル感動ヲ受ク
ルヲ願ミシレバ能ハスノ非常ノ勞動及ヒ困苦ヲ忍ビ勤務ニ從事シ爲メニ健康ヲ妨害シ
全ク職務ニ堪ヘサレニ至リ其証據明亮ニシテ退職スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖
モ亦之ヲ給ス

其退職恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト甲號表面ノ如ク但十
一年未滿者ニ給ス可キ恩給ハ其十一年ニ等シキ額ニ依ル

第十一條 免除恩給ハ下士及ヒ卒服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ或ハ服
役滿期トナリ或ハ疾病ノ爲メ免官若クハ免役スル者ニ之ヲ給ス

前條第二項ニ掲グルカ如キ傷疾疾病ヲ受ケ永久健康ヲ妨害シ全ク兵役ニ堪ヘス其証
據明亮ニシテ免官若クハ免役スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス

其免除恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト乙號表面ノ如シ但十
一年未滿者ニ給ス可キ恩給ハ十一年ニ等キ額ニ依ル

第十二條 准士官以上傷疾ヲ受ケルト雖モ尙ホ奉職セシメ後日退職スル者ハ現官等ニ
依リ恩給ヲ給ス但負傷增加恩給ハ負傷當時ノ官等ニ依リ之ヲ給ス

第十三條 傷疾疾病ニ起因シ恩給ヲ願出ル者ハ其原因症候トモ詳細之ヲ開陳ス可キ

第十四條 傷疾疾病ヲ受ケシ事故及ヒ其原因ハ見証証書又ハ公文若クハ查問會議口供
書ノ寫ヲ以テ之ヲ証明ス可キ

第十五條 傷疾疾病不治ノ狀ハ陸軍病院長及ヒ主任醫官（地方病院ニ於テ治療ヲ受ケ
ル者ハ其院長并ニ主任醫師）ノ診斷証書ヲ以テ之ヲ證スヘキ

其診斷証書ハ傷疾疾病ノ原因症候及ヒ其治療方法ヲ述ヘ以テ不治ノ狀ヲ詳悉ス可キ
病院ニ就キ治療ヲ受ケサル者ト雖モ陸軍病院長若クハ地方病院長ノ診斷書ヲ要ス

第十六條 傷疾疾病不治ノ狀ハ軍醫若クハ地方醫師ノ証書ニ依ルト雖モ其軍務ニ堪ヘ
サルマ否ヤハ當該所管ニ於テ檢査判定シ尙ホ監軍部長ノ審査ヲ經テ之ヲ陸軍卿ニ移
ス可シ陸軍卿ハ更ニ軍醫本部ニ下シテ覆覈セシメ以テ之ヲ決定ス

第十七條 恩給ハ軍人ノ現官階ニ依リ之ヲ給ス但下士以上其官階ニ進ミ未タ進級條例
ノ停年最下限ノ半ニ至ラスニテ退職免官ヲ願フ時ハ前官ニ準シテ之ヲ給ス其戰闘若
クハ公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ或ハ戰地ニ於テ受ケタル疾病ノ爲メ恩給ヲ給スルハ此限
コアラズ

第十八條 准士官以上退職恩給ヲ願フ時所管長官ハ陸軍卿ニ呈スル進達書ノ日ニ於テ
直ニ休暇ヲ命ス下士卒免除恩給ヲ願フ時亦該長官同上ノ日ニ於テ直ニ免官若クハ免
役ス可キ

第十九條 戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラス公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ左ノ各項ニ該ル者ハ恩
給ノ外更ニ丙號表面ノ金額ヲ加給ス但公務ノ爲メ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失
フニ等シキ不治ノ症トナル者モ亦本條ニ準ス

- 一 兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者
 - 二 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者
 - 三 一肢ヲ亡シ或ハ全ク二肢ノ用ヲ失フニ至ル者
 - 四 前項ニ等シ傷痕ヲ受ケシ者
 - 五 全ク一肢ノ用ヲ失フ者
 - 六 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者
- 第二十條 傷痕疾病ニ依リテ恩給ヲ受ケ引續キ重症ニ趨キ或ハ現役ヲ離レシ後重症ニ趨キタル者左項ノ期限ニ照出ル時ハ檢査ノ上事實相違ナキニ於テハ更ニ恩給ヲ給シ或ハ負傷増加恩給ヲ給ス可シ但更ニ恩給ヲ願フハ現役ヲ離ルノ際其傷痕ノ爲メ服役難キ確定ヲ得タル者ニ限ル
- 一 一肢ノ用ヲ失ヒ或ハ一肢ノ用ヲ失フニ等シキ者ハ現役ヲ離レヨ日ヨロ貳箇年
 - 二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ或ハ兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者ハ現役ヲ離レヨ日ヨロ三箇年

第三章 寡婦(孤兒)扶助料

第二十一條 寡婦扶助料ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス其給額ハ當該軍人ノ官階ト死歿ノ級故トニ依リテ差アリ

- 一 戰闘或ハ公務ノ爲メ死歿シ或ハ之ニ依リテ受ケタル傷痕ハ原因シテ死歿シ又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ健康ニ有害ナル感動ヲ受ケタル事ニ照シテ能ハスシテ非常ノ勞動及ヒ困苦ヲ忍ビ勤務ニ從事シ爲メニ發病死歿シ又ハ平時當務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ感染シ死歿シタル軍人ノ寡婦
- 二 退職若シハ免除恩給ヲ受ケタル後或ハ之ヲ受ク可キ權ヲ有シテ死歿シタル軍人ノ寡婦

其扶助料ノ額第一項ニ該ル者ハ丁號表面ニ依リ第二項ニ該ル者ハ戊號表面ニ依リ

第二十二條 戰闘及ヒ公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケルト雖ヨ其傷痕ニ原因セザル他病ニテ死歿シタル軍人ノ寡婦ハ扶助料ヲ給セス

第二十三條 戰闘中踪跡ヲ失フ者其死ハ公務ニ原因セヨ相違ナキヲ確認スル時ハ第

第二十一條 第一項ヲ適用ス

第二十四條 寡婦ハ陸軍簿籍ニ登記セシ者ニシテ其夫ノ現役ヲ去ルノ時ヨリ一箇年以前ニ嫁シタル者ニ限ル可シ但前妻若クハ現時ノ妻ニ生レタル兒子アレハ嫁時年月ノ查覈ヲ要セス又戰死或ハ傷疾疾病ニ原因シテ死シタル軍人ノ寡婦ハ嫁時ノ年月ニ關セシ負傷又ハ發病前ニ婚配セシ者ニ限ル

第二十五條 寡婦其家ヲ去リ若クハ再婚スル時ハ扶助料ヲ受クルノ權消絶ス

第二十六條 寡婦死去シ或ハ前條ノ事故アリテ扶助料ヲ受クルノ權消絶スル時ハ當該軍人ノ孤兒(嫡子庶子養子ヲ論セス戸籍ニ登記セシ者但養子ハ死傷前ノ養子ニシテ男女ニ拘ハラス家名ヲ繼承スル者ニ限ル)ニシテ其家名繼承ノ者ニハ寡婦ト等シキ扶助料其他ノ者ニハ其額三分ノ二ヲ給ス又當該軍人ノ死シタル時孤兒ノ母在ラザル者ハ直ニ其孤兒ニ給ス

第二十七條 孤兒扶助料ハ教子アル時ハ其年長ナル者ニ給シ權利消絶ノ期ニ至レハ順次年少者ニ及フ但二十歳未滿ト雖モ官署ニ奉職シ俸給ヲ受ケ或ハ其戸籍ヲ去リ或ハ

男女共ニ嫁娶シタル時ハ其權消絶ス

第二十八條 扶助料ヲ受クル者禁錮以上ノ刑ニ處セラル、時ハ之ヲ止メ更ニ其轉給ヲ受ル可キ者ニ之ヲ給ス

第二十九條 軍人死歿シ扶助料ヲ受ル可キ寡婦孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受クル寡婦再嫁若クハ復籍シテ孤兒ナク尙ホ從來死者ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他ノ之ヲ奉養スルノ子孫ナキ時ハ其情狀ニ依リ寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二ヲ終身給スルコトアル可シ

其扶助料父母祖父母共ニ存在スル時ハ先ツ之ヲ父ニ給シ其父死歿若クハ權利消絶スルコトアレハ轉シテ之ヲ母ニ給ス以下其母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此例ニ依リ之ヲ轉給ス可シ但父及ヒ祖父ハ年齢五十歳以上其未滿ハ癡疾又ハ不具ニシテ產粟ヲ營ムコト能ハサシ者又母及ヒ祖母ハ夫ナキ者ニシテ且孰レモ軍人死歿ノ際年齢五十歳以上ニシテ其戸籍ニ在ル者ニ限ル

第三十條 扶助料ヲ仰カントスル時ハ本人主名ヲ以テ親族二名及ヒ後見人アレハ其

見入若シ親族ナキ時ハ同郷ノ戸主二名連署シ其郡區長戸長ノ與印セル願書ヲ以テ之ヲ地方廳ニ呈ス可シ

其夫若クハ父戰死其他公務ノ爲メ直ニ死亡セシ者ハ見証證書若クハ公文ノ内其一ヲ證據ニ供シ其傷痕疾病ニ基ク者ハ該書類ノ外尙ホ軍醫若クハ地方醫師ノ診斷證書ヲ證據ニ供ス可シ但地方醫師ノ診斷ヲ受ケタル時ハ尙ホ地方官吏ノ檢視證書ヲ添附シ死歿ノ原因ヲ証明ス可シ

第四章 服役年算則

第三十一條 服役年ノ始期及ヒ終期ノ例ハ左ノ各項ニ依ル可シ

- 一 明治四年八月ヲ以テ始期トス故ニ其以前ヨリ勤仕ノ者ト雖モ總テ同月ヲ以テ始トス（但明治四年八月以前ヨリ勤仕シタル者ハ明治四年七月ノ現官等ニ對スル奉給ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スルノ金額ヲ以テ恩給支給ノ際別ニ一時賜金トシテ給與ス
- 二 下士以上ハ其初任當日ヨリ起算ス

三 徵兵ハ入營初日即チ毎年四月二十日ヨリ起算ス

四 壯兵其他諸種ノ方法ヲ以テ軍籍ニ入りタル者ハ其就役ノ當日ヨリ起算ス

五 上長官士官准士官ハ退職恩給ノ願書該長官ヨリ陸軍卿ニ呈スル進達書ノ日ヲ以テ終期トス

六 下士卒ハ免官免役ノ日ヲ以テ終期トス

第三十二條 十七歳未満ハ恩給服役年ノ計算ニ算入セス士官以上待命及ヒ非職中ノ月日ハ服役實期ニ算入ス但非職中地方病院學校及ヒ其他ノ事業ニ從事シ其給料ヲ受ケ非職俸ヲ給セサル時間ハ之ヲ除算ス

第三十三條 海軍軍人轉シテ陸軍人トナル者ハ海軍服務ノ年月ヲ通算ス又文官轉シテ陸軍軍人トナリタル者并ニ陸軍軍人ノ現役ニ在ラスシテ文官ヲ兼任シ文官ノ俸給ヲ受クル者恩給ヲ受クルノ期ニ至ル迄ハ其文官奉仕中ノ年月ハ十六箇月ヲ以テ一年トシ之ヲ通算ス

第三十四條 豫備後備ニ在ルノ月日ハ服役實期ニ算セスト雖モ復習ノ外現役ニ徵集ス

ルコトアル時ハ前後ノ現役ヲ通算ス

第三十五條 退職免役ノ後再ヒ現役ニ就ク者ハ前後ノ現役ヲ通算ス

第三十六條 逃亡ノ者其逃亡以前ノ現役ハ其歸營以後ノ現役ニ通算ス

第三十七條 處刑中ノ日數ハ現役年數中ヨリ除算ス

第三十八條 戰時虜獲ニ遭ヒ俘囚トナリタル月日ハ猶ホ平時現役ニ在ルト同シク之ヲ算ス

第五章 從軍年算則

第三十九條 從軍年ハ服役實期外ノ年月ト爲シ之ヲ其服役年數ニ加算スル者トス但其服役實期十一年未滿ニシテ退身スル者ニハ之ヲ加算セス

第四十條 從軍年加算ノ法ハ左ノ各項ニ依ル可シ

一 日本國外ノ戰地ニ於テ服役スル時ハ二箇年ヲ増加ス

二 出征軍ニ編入セラレ或ハ合圍若クハ臨戰地境內ニ於テ服役セシ時又戰時平時ヲ論セス日本國外ノ地ニ於テ鎮戍ノ軍隊ニ在リシ時及ヒ海戰ニ當リ其船中ニ在リ

シ時ハ一箇年ヲ増加ス

三 海戰ニ當リ海岸防禦ニ從事セシ時ハ半箇年ヲ増加ス

第四十一條 出征軍ノ定メオラスニテ一時出兵ノ時ト雖モ出征軍ト視做ス可キ場合

ニ於テハ陸軍卿上請シテ從軍年ニ算入スルコトヲ決定ス

第四十二條 從軍年ヲ算スルノ法ハ十二箇月間數回ノ戰役ニ從フト雖モ重複シテ之ヲ算セス但其一年以上ニ跨リ十二箇月ニ餘ル所ノ分數ハ前條ニ依リ之ヲ計算ス

第六章 恩給支給順序

第四十三條 恩給ノ願書ハ所管長官ヨリ檢閲監軍部長ヲ經テ陸軍卿ニ呈シ陸軍卿之ヲ

太政官ニ上申ス

寡婦(孤兒)扶助料ノ願書ハ居住地地方廳ヨリ内務卿ニ呈シ内務卿之ヲ陸軍卿ニ移シ

陸軍卿ヨリ太政官ニ上申ス

第四十四條 太政官ニ於テハ之ヲ審査シタル後恩給許可令及ヒ恩給登錄寫帖ヲ内務大臣陸軍三卿ニ下シ内務卿ヨリ管轄地方廳ヲ經テ之本ハニ下シ依テ以テ年々金圓受

領ノ証ト爲サシム

恩給登錄寫帖ヲ下付スルノ前ニ於テ陸軍卿ハ其恩給ヲ受ク可キ本人ニ計算書ヲ下シ以テ其算則ヲ示ス

第四十五條 退職及ヒ免除恩給并ニ扶助料下賜ノ始期ハ左ノ各項ニ依ル

- 一 准士官以上ハ計算書日附ノ翌日
- 二 下士卒ハ免官免役ノ翌日
- 三 寡婦孤兒扶助料ハ當該軍人死去ノ翌日

第四十六條 恩給及ヒ扶助料ハ一月四月七月十月ニ前三箇月分ノ金額ヲ大藏省ヨリ本人所在ノ地方廳ヲ經テ之ヲ下付ス但其交付者ハ恩給登錄寫帖ヲ披閱ノ上戸長ノ証セラル本人生存書及ヒ金額受領証書ト引替ニ其金額ヲ交付ス

恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其金額受領ノ地ヲ轉セントスル時ハ金額交付期月ノ三箇月前ニ其所在ノ地方廳ニ願出可シ若シ期日ヲ過クル者ハ仍ホ元所在地ニ於テ之ヲ交付ス

第四十七條

恩給若クハ扶助料ヲ受クル者權利消絶ニ属スル時ハ地方廳其恩給登錄寫帖ヲ收メテ内務省ニ出シ内務省ハ之ヲ太政官ニ還付シ其旨ヲ大藏省陸軍省ニ報告ス

但扶助料移轉ス可キ者アル時恩給登錄寫帖ヲ收メス更ニ扶助料請願ノ證ト爲サシム

第四十八條 恩給登錄寫帖ヲ受領セシ者盜難水火災等ノ爲メ之ヲ失亡スル時ハ速ニ其旨届出可シ此場合ニ於テハ内務卿ヨリ證明書ヲ下付ス

第七章 賑恤金

第四十九條 賑恤金ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス

- 一 下士卒戰鬪或ハ戰地ニ於テ公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ服役ニ堪ヘス免官除隊ス
ト雖モ第十九條末項ヨリ輕傷ニシテ免除恩給ヲ受ケサル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第五項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス
- 二 下士卒平時公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ前項ト等シキ者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス
- 三 下士卒服役實期五滿年上以十一年未滿ノ者公務ノ故ニアラスシテ傷痍疾病ヲ受

ケ全ク服役ニ堪ヘス其營業ヲ妨クルコト至ル者及ヒ其五年未滿ト雖モ一肢以上ノ切斷ヲ受ケ若クハ兩眼ヲ盲スル者ハ其官階ニ應スル負傷增加第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

四 扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒又父母祖父母ナクノ從來死者ニ依リ生活セル廿歳未満又ハ廿歳以上ト雖モ癩疾ノ兄弟姉妹アリテ之ヲ教育スルノ親族ナキ者ハ其寡婦ニ相當セル扶助料一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

第五十條 前條ノ賑恤金ハ本人ノ情願又ハ所管長官ノ申請ニ依リ陸軍卿之ヲ詮議シ太政官特別ノ裁可ヲ以テ之ヲ下賜ス其金額ハ大藏省ヨリ地方廳ヲ經テ之ヲ下付ス

第八章 給助金

第五十一條 給助金ハ下士以上現役中死歿シ又ハ五年以上勤続キノ後罷役或ハ免官トナリ恩給若クハ扶助料ヲ賜ハラサル者ニ之ヲ給ス其給額ハ已號表面ニ依ル但懲戒ノ爲メ免官或ハ刑名宣告ニ至ラサルモ不正ノ所業確認ノ者ニハ之ヲ給セス

陸軍恩給金額表畧ス

○第三拾八號 九月十一日 官省院廳府縣

海軍恩給令別冊ノ通相定候條此旨相達候事（但從前ノ海軍退隱令ハ廢止ス

別冊

海軍恩給令

海軍恩給令目錄

- 第一章 總則
- 第二章 恩給及ヒ増加
- 第三章 寡婦(孤兒)扶助料
- 第四章 服役年算則
- 第五章 從軍年算則
- 第六章 給恩支給順序
- 第七章 賑恤金
- 第八章 給助金

海軍恩給令

第一章 總則

第一條 海軍恩給ハ海軍諸種ノ勤勞ニ依テ之ヲ給スル者ナリ其種類別テ左ノ五項トス

- 一 退職恩給
- 二 退役恩給
- 三 寡婦(孤兒)扶助料
- 四 賑恤金
- 五 給助金

第二條 退職恩給退役恩給寡婦扶助料ハ本人ノ終身孤兒扶助料ハ男女共ニ二十歳ニ至

ル迄之ヲ給シ賑恤金給助金ハ一時限リ之ヲ給ス

第三條 軍人ハ定限ノ年齢ニ達スレハ退職退役ニテ恩給ヲ受クルヲ例トス其定限左ノ如シ

軍醫大監 主計大監 六十五

機關大監 機關中監 軍醫中監 軍醫少監 主計中監 主計少監 六十

大佐 中佐 機關少監 大軍醫 中軍醫 大主計 中主計 掌砲 中主計 掌砲 水兵上長 木工上長 機關工上長 掌砲長 水兵長 木工 五十五

少佐 大機關士 中機關士 少軍醫 少主計 下士 五十

大尉 中尉 少機關士 卒 四十五

少尉 軍醫補 主計補 四十

少尉補 機關士補 三十

第四條 軍人定限ノ年齢ニ達スト雖モ前途尙ホ任用ニ堪ヘ若シハ材能特拔又ハ老練者ヲ要スル職務ニ在ル者ハ仍ホ留任ヲ命スルコトアル可シ但シ強テ現役ヲ辭スル者ハ此

限ニアラス

第五條 軍人未ダ定限ノ年齢ニ達セスト雖モ服役實期十一年以上ノ者コシテ服役ニ堪ヘサルヲ認メタル時ハ海軍卿旨ヲ諭シテ現役ヲ退キ恩給ヲ願ハシムルコトアル可シ

第六條 恩給ハ公權剝奪ノ時ハ全ク之ヲ止メ左ノ各項ニ該ル時ハ其時間ノミ之ヲ停ム
一 公權停止ノ時 二 事故アリテ日本人タルノ分限ヲ失フ時

三 時政府ノ許可ナクシテ日本國外ニ出タル時

第七條 恩給ヲ受ケタル者再ヒ現役ニ就キ若クハ文官ニ任シ俸給ヲ受クル時ハ其間該恩給ヲ停ム但其負傷増加恩給ハ仍ホ之ヲ給ス

第八條 寡婦若シハ孤兒扶助料ハ當該軍人死歿ノ日(戰地等ニテ死歿ノ者ハ海軍官憲ヨリ報告ノ日)ヨリ一箇年間願出サル時ハ其權利消絶ス

恩給及ヒ扶助料ハ一箇年以上其金額ノ受領ヲ怠リタル時ハ其怠リタル間ノ金額ハ之ヲ給セス

第九條 恩給及ヒ扶助料ノ金額計算ニ就キ違算アリト思惟スル時ハ初メテ金圓ヲ受領

セヨ日ヨリ三箇月以内ニ管轄地方廳ヲ經テ海軍卿ニ上申ス可シ若シ此期限ヲ過クル時ハ之ヲ受理セス

第二章 恩給及ヒ増加

第十條 退職恩給ハ准士官以上服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ又ハ疾病ニ罹リ查問會議ノ處決若クハ海軍卿ノ諭旨ニ依リ退職スル者ニ之ヲ給ス

戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラス公傷ノ爲メニ傷痕ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ或ハ之ヲ失フニ等シト認ムル者又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ航海中若クハ戰時ニ於テ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ非常ノ勞動及ヒ困苦ヲ忍ビ勤務ニ従事シ爲メニ健康ヲ妨害シ全ク職務ニ堪ヘサルニ至リ其證據明亮ニシテ退職スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス

其退職恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト甲號表面ノ如シ但十一年未滿ノ者ニ給ス可キ恩給ハ其十一年ニ等シキ額ニ依ル

第十一條 退職恩給ハ下士退役恩給ハ卒服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ

或ハ服役滿期トナリ或ハ疾病ノ爲メ退職若クハ退役スル者ニ之ヲ給ス

前條第二項ニ掲グルカ如キ傷痕疾病ヲ受ケ永久健康ヲ妨害シ全ク兵役ニ堪ヘス其證據明亮ニシテ退職若クハ退役スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス

其退職恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト乙號表面ノ如シ但十一年未滿ノ者ニ給ス可キ恩給ハ十一年ニ等シキ額ニ依ル

第十二條 軍人傷痕ヲ受クルト雖モ尙ホ奉職セシメ後日退職苦シハ退役スル者ハ現官等ニ依リ恩給ヲ給ス但負傷増加恩給ハ負傷當時ノ官等ニ依リ之ヲ給ス

第十三條 下士以上ノ恩給願書ハ所管長官ヲ經テ海軍卿ニ卒ハ所管長官ニ其履歷書ヲ副呈ス可シ

第十四條 傷痕疾病ニ起因シ恩給ヲ願出ル者ハ其原因症候等詳細之ヲ開陳ス可シ

第十五條 傷痕疾病ヲ受ケシ事故及ヒ其原因ハ見証証書又ハ公文若クハ查問會議口供書ノ寫ヲ以テ之ヲ証明ス可シ

第十六條 傷痕疾病不治ノ狀ハ海軍病院長並ニ主任醫官(地方病院ニ於テ治療ヲ受ケ

者ハ其院長並ニ主任醫師ノ診斷証書ヲ以テ之ヲ証ス可シ

其診斷証書ハ傷痕疾病ノ原因症候及ヒ其治療方法ヲ述ヘ以テ不治ノ狀ヲ詳悉ス可シ

病院ニ就キ治療ヲ受ケサル者ト雖モ海軍病院長若シハ地方病院長ノ診斷証書ヲ要ス

第十七條 傷痕疾病不治ノ狀ハ軍醫若シハ地方醫師ノ証書ニ依ルト雖モ其軍務ニ堪ヘ

サルヤ否ヤヲ當該ノ所管ニ於テ檢査判定シ之ヲ海軍卿ニ呈スヘシ海軍卿ハ臨時調査

委員ヲ撰定シ更ニ覆數セシメ以テ之ヲ決定ス

第十八條 下士以上恩給ヲ願フ時ハ所管長官其海軍卿ニ呈スル進達書ノ日ニ於テ直ニ

休暇ヲ命ジ卒恩給ヲ願フ時亦所管長官同上ノ日ニ於テ直ニ免役ス可シ

第十九條 凡恩給ハ軍人ノ現官階ニ依リ之ヲ給ス但其官階ニ進ミ未タ滿十八箇月ニ至

ラズシテ退職若シハ退役ヲ願フ時ハ前旨ニ準シテ之ヲ給ス其戰闘又ハ公務ノ爲メ傷

痕ヲ受ケ或ハ戰地若シハ航海中ニ於テ受ケタル疾病ノ爲メ恩給ヲ給スルハ此限コ

ラス

第二十條 戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラズ公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケ左ノ各項ニ該ル者ハ恩

給ノ外更ニ丙號表面ノ金額ヲ加給ス但公務ノ爲メ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失
フコ等シキ不治ノ症トナル者モ亦本條ニ準ス

一 兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者 二 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者

三 一肢ヲ亡シ或ハ全ク二肢ノ用ヲ失フコ至ル者

四 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者 五 全ク一肢ノ用ヲ失フ者

六 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者

第二十一條 傷痕疾病ニ因リテ恩給ヲ受ケ引續キ重症ニ趨キ或ハ現役ヲ離レシ後重症

ニ趨キタル者左ノ期限内ニ願出ル時ハ檢査ノ上事實相違ナキニ於テハ更ニ恩給ヲ給

シ或ハ負傷増加恩給ヲ給ス可シ但更ニ恩給ヲ願フハ現役ヲ離ルルノ際其傷痕ノ爲メ

服役シ難キ確定ヲ得タル者ニ限ル

一 一肢ノ用ヲ失ヒ或ハ一肢ノ用ヲ失フコ等シキ者ハ現役ヲ離レシ日ヨリ二箇年

二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ或ハ兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者ハ現役ヲ離

レシ日ヨリ三箇年

第三章 寡婦(孤兒)扶助料

第二十二條 寡婦扶助料ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス其給額ハ當軍該人ノ官階ト死歿ノ緣故トコ因リテ差アリ

一 戰鬪或ハ公務ノ爲メ死歿シ或ハ之ニ因リテ受ケタル傷痕ニ原因シテ死歿シ又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ航海中若クハ戰地ニ於テ非常ノ勞動及ヒ困苦ノ勤務ニ服シ爲メ健康ヲ害セラレ發病終ニ死歿シ又ハ平時常務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ感染死歿シタル軍人ノ寡婦

二 退職若クハ退役恩給ヲ受ケタル後或ハ之ヲ受ク可キ權ヲ有シテ死歿シタル軍人ノ寡婦其扶助料第一項ニ該ル者ハ丁號表面ニ依リ第二項ニ該ル者ハ戊號表面ニ依ル

第二十三條 戰鬪若クハ公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケタル雖ヒ其傷痕ニ原因セサル他病ニテ死歿シタル軍人ノ寡婦ハ扶助料ヲ給セス

第二十四條 戰鬪中踪跡ヲ失フ者其死亡公務ニ原因セシコ相違ナキヲ確認スル時ハ第

第二十二條第一項ヲ適用ス

第二十五條 寡婦ハ海軍簿籍ニ登記セシ者コシテ其夫ノ現役ヲ去ルノ時ヨリ一箇年以前ニ嫁シタル者ニ限ル可シ但前妻若クハ現時ノ妻ニ生レタル兒子アレハ嫁時年月ノ查覈ヲ要セス又戰死或ハ傷痕疾病ニ原因シテ死シタル軍人ノ寡婦ハ嫁時ノ年月ニ關セズ負傷又ハ發病前ニ婚配セシ者ニ限ル

第二十六條 寡婦其家ヲ去リ若クハ再婚スル時ハ扶助料ヲ受クルノ權消絶ス

第二十七條 寡婦死去シ或ハ前條ノ事故アリテ扶助料ヲ受クルノ權消絶スル時ハ當該軍人ノ孤兒(嫡子庶子養子ヲ論セス)籍ニ登記セシ者但養子ハ死傷前ノ養子コシテ男女ニ拘ハラヌ家名ヲ繼襲スル者限ル)コシテ其家名繼襲ノ者コハ寡婦ト等シキ扶助料其他ノ者コハ其額三分ノ二ヲ給ス又當該軍人ノ死シタル時孤兒ノ母在ラサル者ハ直ニ其孤兒ニ給ス

第二十八條 孤兒扶助料ハ數子アル時ハ其年長ナル者ニ給シ權利消絶ノ期ニ至レハ順次年少ナル者ニ及フ但二十歳未滿ト雖ヒ官署ニ奉職シ俸給ヲ受ケ或ハ其戶籍ヲ去リ

或ハ男女共ニ嫁娶シタル時ハ其權消絶ス

第二十九條 扶助料ヲ受クル者禁錮以上ノ刑ニ處セラレ、時ハ之ヲ止メ更ニ其轉給ヲ受ル可キ者ニ之ヲ給ス

第三十條 軍人死歿シ扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受クル寡婦再嫁若クハ復籍シテ孤兒ナク尙ホ從來死者ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他ニ之ヲ奉養スルノ子孫ナキ時ハ其情狀ニ依リ終身寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二ヲ給スルコトアル可シ

其扶助料ハ父母祖父母共ニ存在スル時ハ先ツ之ヲ父ニ給シ其父死歿若クハ權利消絶スルコトアレハ轉シテ之ヲ母ニ給ス以下其母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此例ニ依リ之ヲ轉給ス可シ但父及ヒ祖父ハ年齢五十歳以上其未滿ハ癡疾及ヒ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル者又母及ヒ祖母ハ夫ナキ者ニシテ其熟レモ軍人死歿ノ際年齢五十歳以上ニシテ其戸籍ニ在ル者ニ限ル

第三十一條 扶助料ヲ仰カントスル時ハ本人主名ヲ以テ親族二名及ヒ後見人アレハ其

後見人若シ親族ナキ時ハ同郷ノ戸主ニ名連署シ其郡區長戸長ノ與印セシ願書ヲ以テ地方廳ニ進達ス可シ但恩給登錄寫帖アレハ之ヲ添附ス可シ

其夫若クハ父戰死其他公務ノ爲メ直ニ死亡セシ時ハ死亡報告若クハ死亡証書若クハ他ノ公文ノ内其一ヲ證據ニ供シ其偽疾疾病ニ起因スル者ハ該書類ノ外尙ホ軍醫若クハ地方醫師ノ診斷書ヲ證據ニ供ス可シ但地方醫師ノ診斷ヲ受ケタル時ハ尙ホ地方官吏ノ檢視証書ヲ添附シ死歿ノ原因ヲ詳細證明ス可シ海軍卿ハ之ヲ調査委員ニ下シ其事實ヲ調査セシメ以テ決定ス

第四章 服役年算則

第三十二條 服役年ノ始期及終期ノ例ハ左ノ各項ニ依ル可シ

一 准士官以上ニシテ四上長四長及ヒ樂長ヲ除クノ外ハ初任ノ日四上長四長及ヒ樂長以下ハ四等卒及ヒ樂生タルノ日ヲ以テ服役年ノ始期トス

但准士官以上ハ明治四年八月以前下士以下ハ明治二年五月以前准卒ハ海軍定員ニ准セサル以前ノ服役年ニ算入セス然レモ其以前ヨリ勤仕シタル者ハ其算

入期ノ前月ニ於ケル現官等ニ對スル俸給ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一箇年ニ當
テ其年數ニ應スルノ金額ヲ以テ恩給支給ノ際別ニ一時賜金トシテ給與ス

二 下士以上ハ退職恩給ノ願書ヲ所管長官ヨリ海軍卿ニ呈スル進達書ノ日卒ハ退役
ノ日ヲ以テ終期トス

第三十三條 十七歳未満ハ恩給服役年ノ計算ニ算入セス士官以上待命及ヒ非職中ノ月
日ハ服役實期ニ算入ス但非職中地方病院學校及ヒ其他ノ事業ニ從事シ其給料ヲ受ケ
非職俸ヲ給サセハ時間ハ之ヲ除算ス

第三十四條 軍陸軍人轉シテ海軍軍人トナシ者ハ陸軍服役ノ年數ヲ通算ス又文官轉シ
テ海軍軍人トナリタル者並ニ海軍軍人ノ現役ニ在ラスノ文官ヲ兼任シ文官ノ俸給ヲ
受クル者恩給受クルノ期ニ至ル迄ハ其文官奉仕中ノ年月ハ十六箇月ヲ以テ一年トシ
之ヲ通算ス

第三十五條 退職若クハ退役ノ後再ヒ現役ニ就ク者ハ前後ノ現役ヲ通算ス

第三十六條 逃亡ノ者其逃亡以前ノ現役ハ其復歸以後ノ現役通算ス

第三十七條 處刑中ノ日數ハ現役年數中ヨリ除算ス

第三十八條 戰時虜獲ニ遭ヒ俘囚トナリタル月日ハ猶ホ平時現役ニ在ルト同シ之ヲ
算ス

第五章 從軍年算則

第三十九條 從軍年ハ服役實期外ノ年月ト爲シ之ヲ其服役年數ニ加算スル者トス但其
服役實期十一年未滿ニシテ退身スル者ニハ之ヲ加算セス

第四十條 從軍年加算ノ法ハ左ノ各項ニ依ル可シ

- 一 日本國外ノ戰役ニ從事中ハ二箇年ヲ增加ス
- 二 出征艦隊ニ編入中及ヒ合圍若クハ陸戰地境內ニ服役中ハ一箇年ヲ增加ス
- 三 戰時平時ヲ論セス外國航海中第半箇年ヲ增加ス

第四十一條 出征軍ノ定メニテ一時出兵ノ時ト雖モ出征軍ト視做ス可キ場合
ニ於テハ海軍卿上請ニテ從軍年ニ算入スルコトヲ決定ス

第四十二條 從軍年ヲ算スルノ法ハ十二箇月間數回ノ戰役ニ從フト雖モ重複シテ之ヲ

算セズ但其一年以上ノ跨リ十二箇月ニ餘ル所ノ分數ハ前條ニ依リ之ヲ計算ス

第六章 恩給支給順序

第四十三條 恩給ノ願書ハ所管長官ヨリ海軍卿ニ呈シ海軍卿之ヲ太政官ニ上申ス
寡婦若クハ孤兒扶助料ノ願書ハ居住ノ地方廳ヨリ内務卿ニ呈シ内務卿之ヲ海軍卿ニ
移シ海軍卿ヨリ太政官ニ上申ス

第四十四條 太政官ニ於テハ之ヲ審査シタル後恩給許可令及ヒ恩給登錄寫帖ヲ内務大
藏海軍ノ三卿ニ下シ内務卿ヨリ管轄地方廳ヲ經テ之ヲ本人ニ下シ依テ以テ年々金圓
受領ノ証ト爲サシム

恩給登錄寫帖ヲ下付スルノ前ニ於テ海軍卿ハ其恩給ヲ受シ可キ本人ニ計算書ヲ下シ
以テ其算則ヲ示ス

第四十五條 退職及ヒ退役恩給並ニ扶助料下賜ノ始期ハ左ノ各項ニ依ル可シ

- 一 下士以上ハ計算書日付ノ翌日
- 二 卒ハ免役ノ翌日

三 寡婦若クハ孤兒扶助料ハ當該軍人死歿ノ翌日

第四十六條 恩給扶助料ハ一月四月七月十月ニ於テ前三箇月分ノ金額ヲ大藏省ヨリ本
人所在ノ地方廳ヲ經テ下付ス但其交付者ハ恩給登錄寫帖ヲ披閱ノ上戸長ノ証セル本
人生存書及ヒ金額受領証書ト引替ニ其金額ヲ交付ス可シ

恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其金額受領ノ地ヲ轉セントスル時ハ金額交付期月ノ三
ヶ月前ニ其所在ノ地方廳ニ願出可シ若シ其期ヲ過クル者ハ仍ホ元所在地ニ於テ之ヲ
交付ス

第四十七條 恩給若クハ扶助料ヲ受クル者權利消絶ニ屬スル時ハ地方廳其恩給登錄寫
帖ヲ收メテ内務省ニ出シ内務省ハ之ヲ太政官ニ還付シ其旨ヲ大藏省海軍省ニ報告ス
但扶助料移轉ス可キ者アル時ハ恩給登錄寫帖ヲ收メス更ニ扶助料請願ノ証ト爲シム
第四十八條 恩給登錄寫帖ヲ受領セシ者盜難水火災等ノ爲メ之ヲ亡失スルキハ速ニ其
旨ヲ届出可シ此場合ニ於テハ内務卿ヨリ証明書ヲ下付ス

第七章 賑恤金

第四十九條 賑恤金ハ左ノ項目ニ該ルル者ニ之ヲ給ス

- 一 下士卒戰鬪或ハ戰地ニ於テ公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ服役ニ堪ヘズ免官除隊ス
ト雖モ第二十條末項ヨリ輕傷ニシテ免除恩給ヲ受ケサル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第五項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス
- 二 下士卒平時公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ前項ト等シキ者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス
- 三 下士卒服役實期滿五年以上十一年未滿ノ者公務ノ故ニ非ズシテ傷痍疾病ヲ受ケ全ク服役ニ堪ヘズ其營業ヲ妨クルコ至ル者及ヒ其五年未滿ト雖モ一肢以上ノ切斷ヲ受ケ若クハ兩眼ヲ盲スル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス
- 四 軍人死歿シ扶助料ヲ受ク可キ其寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ從來死者ニ依リ生活セルル二十歳未滿又ハ二十歳以上ト雖モ癱疾ノ兄弟姉妹アリテ之ヲ教育スルノ親族ナキ者ハ其寡婦ニ相當セル扶助料一ケ年ヨリ少カラズ五ケ年分ヨリ多

カラサル金額ヲ給ス

第五十條 前條ノ賑恤金ハ本人ノ情願又ハ所管長官ノ申請ニ依リ海軍卿之ヲ詮議シ太政官特別ノ裁可ヲ以テ之ヲ下賜ス其金額ハ大藏省ヨリ地方廳ヲ經テ下付ス

第八章 給助金

第五十一條 給助金ハ下士以上現役中死歿シ又ハ五年以上勤績キノ後罷役或ハ免官トナリ恩給若クハ扶助料ヲ賜ハラサル者ニ之ヲ給ス其給額ハ已號表面ニ依リ但懲戒ノ爲メ免官或ハ刑名宣告ニ至ラサルモ不正ノ所業確認ノ者ニハ之ヲ給セス

海軍恩給金額表畧之

○第三拾九號 九月十三日 官省院廳府縣

本年(六月)第貳拾貳號布告ノ旨ニ依リ勳章年金視奪及停止取扱手續左ノ通相定候條此旨相違候事

勳章年金視奪及停止取扱手續

第一條 勳章ヲ有スル者左ノ項目ニ觸ルルトキハ榮譽ヲ汚辱シタル者トス

第一項 重罪輕罪ノ刑ニ該ル者

但輕禁錮以下ノ刑ニ該ル者ハ其所犯ノ情狀ヨモル

第二項 懲戒例及免黜條例ヨリ免官シタル者

第三項 素行修マラス帶勳者タルノ面目ニ汚ス者

第二條 勳章ヲ有スル者ニハ先ツ其勳章勳記年金票佩用免許狀ヲ褫奪シタル後處刑言渡ヲ爲スモノトス

第三條 第一條第一項ニ觸ル、者アルトキハ裁判管轄長官ヨリ司法卿又ハ陸海軍卿ヲ經由シテ其罪狀及刑名ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ

第四條 第一條第二項第三項ニ觸ル、者アルトキハ所轄長官又ハ地方官ヨリ其情狀ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ

第五條 賞勳局總裁ハ其具狀ヲ審査シ重禁錮以上ノ刑ニ該ル者ハ直ニ上奏シ其輕禁錮以下ノ刑又ハ第一條第二項第三項ニ觸ル、者ハ議定官ノ會議ニ依テ其褫奪ノ當否ヲ論定シ褫奪スヘキ者ハ奏請ス

第六條 褫奪ノ裁可アリタルトキハ賞勳局總裁ハ褫奪狀ヲ作り褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官ヲ經由シテ本人ヘ傳達セシム

褫奪ニ及ハサルトキハ賞勳章勳記ヨリ褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官ヘ通知スヘシ

第七條 勳位進級セシ者ナルトキハ前級ノ勳章勳記ヲモ褫奪スヘシ年金票モ亦同シ

第八條 褫奪シタル勳章勳記年金票佩用免許狀ハ褫奪ヲ行ヒタル官廳ヨリ賞勳局ヘ還納スヘシ

第九條 勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留セラレタルトキハ其年月日及ヒ事由ヲ裁判管轄長官ヨリ司法卿又ハ陸海軍卿ヲ經由シテ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ但公訴權消滅スルカ若クハ放免ノ言渡ヲ爲シタルトキハ亦之ヲ申告スヘシ

○第四拾號 九月廿二日 官省院廳府縣

今般京都ニ宮内省支廳設置候條此旨相達候事

○第四拾壹號 九月廿二日 官省院廳府縣

京都宮内省支廳中左ノ職員被置候條此旨相達候事

殿掌 奏任取扱 殿部 判任取扱 殿丁 等外取扱

○第四拾貳號 九月廿二日 官省院廳府縣

奏任官及六位勳六等以上ノ輩在東京ノ外ハ新年紀元天長兩節賀表差出來候處明治十七年ヨリ京都御所ニ於テモ新年參賀式被爲行候ニ付京都住居在勤若クハ出張ノ向ハ參内拜賀シ且紀元天長兩節宮内省支廳ニ參賀可致此旨相達候事

○第四十三號 九月廿二日 府 縣

陸尊陵丁墓堂墓丁自今宮内省ニ被屬候條此旨相達候事

○第四十四號 十月二十日 官省院廳府縣

海軍服制別冊ノ通改正候條此旨相達候事

將校以下並ニ生徒服制表畧之

○第四拾五號 十月二十日 府 縣

公立農學校ニ於テ實驗用田圃ニ供スル爲メ官有地ヲ要スルトキハ每一校五町步以內無
借地利使用差許候條官有地ノ内差支ナキ場所ヲ撰ニ内務省ニ申出ヘシ此旨相達候事

○第四拾六號 十月二十日 府 縣

電信分局及ヒ海底線陸揚庫用地ノ義ハ當分ノ内鐵道用地同様工部省限リ處分可致候條
此旨相達候事（但處分ノ上内務省ニ申出候儀ト可心得事

○第四拾七號 十月廿三日 官省院廳府縣

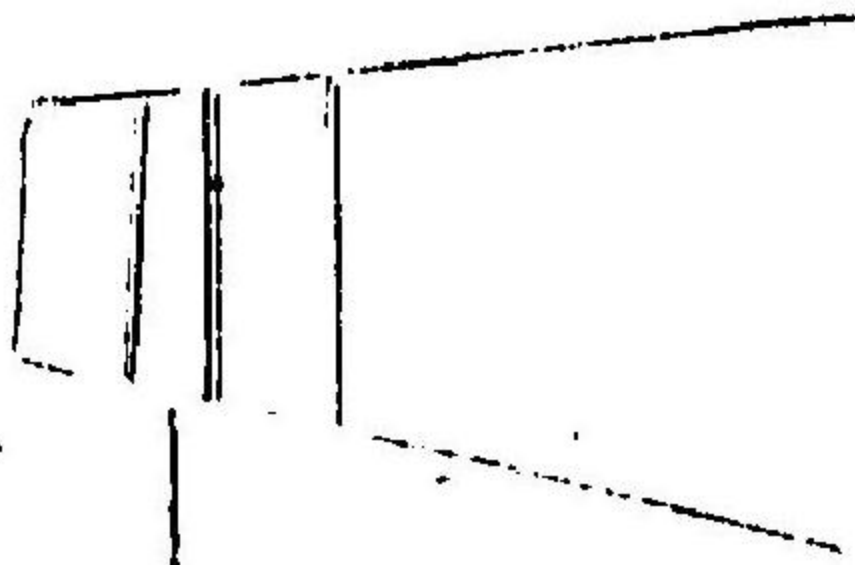
大藏卿松方正義ヨリ明治十一年度歳入出決報告書ヲ上呈ス乃チ會計檢査院ニ於テ其計
算ヲ審查セシメ以テ其確實ナルコトヲ証認ス因テ爲心得相達候事

○第四拾八號 十一月七日 官省院廳府縣

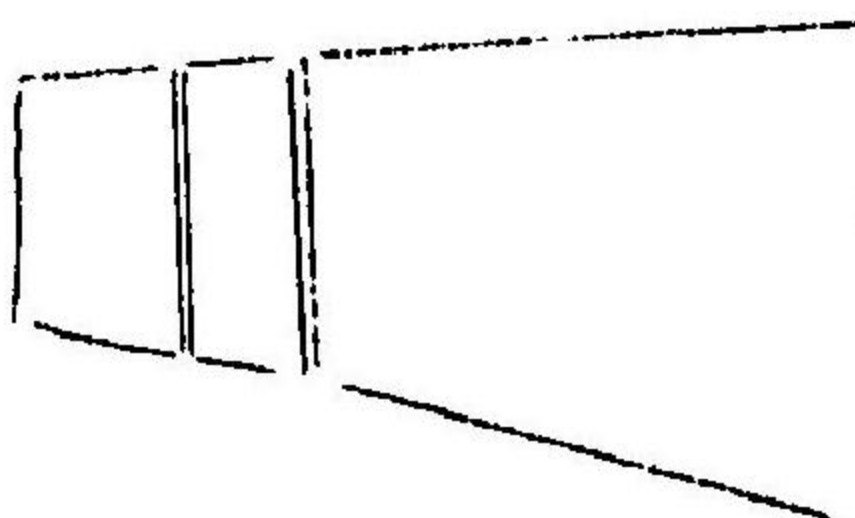
海軍省中五等六等教官大禮服飾章左ノ通相定候條此旨相達候事

五等教官

六等教官



線五厘



線無之

飾章繡色等委任一般ノ例ニ從フ

○第四拾九號 十一月八日 官省院廳府縣

戶長及ヒ府縣立町村立學校職員ノ席次ハ其官等ニ依リ同等官及ヒ其官等相當ノ俸給ヲ受ル無等判任官ノ下席トス（但戶長ト學校職員ト同等ナル時ハ戶長ヲ以テ上席トス 右相達候事

○第五拾號 十一月十日 官省院廳府縣

明治八年（七月）第百三拾貳號達公用土地買上規則第十一則左ノ通改正候條此旨相達候事（但府縣廳ハ此旨管下ヘ布達可致事

第十一則 土地買上ノ際事業ノ急施ヲ要スルトキハ特ニ其旨ヲ所有者ニ達シ三十日以上ノ期日ヲ定メ代價ヲ申出シムヘシ其期日迄ニ代價ヲ申出サレカ又ハ代價ヲ付雙方見込相協ハカルトキハ更ニ建物アル地ニ三十日以上建物ナキ地ハ十日以上ノ期日ヲ定メ其期日迄ニ之ヲ引渡スヘキ旨ヲ達スヘシ但各其期日內ニ雙方共現在ノ實況及ヒ其見込ノ代價ヲ詳記シ評價人ノ意見書ヲ添ヘ地方官ノ認印ヲ受置クヘシ

○第五拾壹號 十一月廿四日 官省

大臣奉議諸省卿ハ掌務ヲ處行スルノ便ニ備フル爲メ書記官一員又ハ二員ヲ秘書官トシテ專屬セシムルコトヲ得 右相達候事

○第五拾貳號 十一月廿六日 官省院廳府縣

明治十四年（三月）第拾壹號達憲兵條例中左ノ通改正候條此旨相達候事

第一章

第一條 戰時ノ下（外寇及ヒ非常内亂）ヲ（若クハ事變）ニ改ム

第四條 並ニ下（上等及ヒ地方裁判所檢事ノ指揮ヲ受ク）ヲ（各裁判所檢事ヨリ指示ヲ受クル時ハ直ニ其事ニ從フヘシ）ニ改ム

第六條 削除

第七條 第六條ニ改メ巡查ヨリノ下（補助）ヲ（助力）ニ改ム

第八條 乃至第十條 削除

第十一條ヲ第七條ニ改メ逮捕シノ下(ヲ本人所屬ノ官廳ニ送付スヘシ若シ之カ爲メニ他人ノ損害ニ罹リシ者アラハ併セテ之ヲ証告スヘシ)ヲ(若シ暴行者數人アリテ悉ク捕獲スルコト能ハサル時ハ其中ニテ造意者或ハ其威權アリ者ヲ逮捕スヘシ)ニ改ム

第十二條削除

第十三條ヲ第八條ニ改ム

第十四條ヲ第九條ニ改メ其ノ下(幫助)ヲ(防救)ニ改ム

第十五條ヲ第十條ニ改ム

第十六條ヲ第十一條ニ改ム

第十七條ヲ第十二條ニ改ム

第十八條ヲ第十三條ニ改ム

第十九條ヲ第十四條ニ改ム

第二章(布置編制)ヲ(布置撰任)ニ改ム

第二十條ヲ第十五條ニ改メ設置シノ下(ニ大隊ヲ以テ之ヲ編制シ)ノ十一字ヲ加フ

第二十一條ヲ第十六條ニ改メ設ノ下(ケ)ヲ(シ)ニ改メ(ニ伍以上ノ分遣ヲ爲ス)ノ十字

ヲ削リ第三管區(小石川區)ヲ(南豐島郡)ニ改メ次(東多摩郡)ヲ加エ第六管區北豐島郡ノ上(小石川區)ヲ加エ(南豐島郡東多摩郡)ヲ削ル

第二十二條削除

第二十三條ヲ十七條ニ改メ(第二十四條ヨリ第二十九條)ヲ(第十八條ヨリ第二十三條)ニ改ム

ニ改ム

第二十四條ヲ第十八條ニ改ム

第二十五條ヲ第十九條ニ改ム

第二十六條ヲ第二十條ニ改ム

第二十七條ヲ第二十一條ニ改ム

第二十八條ヲ第二十二條ニ改ム

第二十九條ヲ第二十三條ニ改ム

第三章

第三十條ヲ第二十四條ニ改メ憲兵隊長ハノ下(憲兵大(中)佐ノ内一名之ヲ任シ)ノ十三字ヲ加フ

第三十一條ヲ第二十五條ニ改ム

第三十二條ヲ第二十六條ニ改ム

第三十三條ヲ第二十七條ニ改ム

第三十四條ヲ第二十八條ニ改メ各ノ下(分)ヲ(大)ニ改ム

第三十五條ヲ第二十九條ニ改ム

第三十六條 第三十七條ヲ削除シ左ノ各條ヲ加フ

第三十條 本部長ハ憲兵少佐之ニ任シ長ヲ補佐シテ部事ヲ整理シ長事故アル時ハ其代理ヲ爲スコトヲ得

第三十一條 次長ハ時々各管區并ニ各屯所ヲ巡回スヘシ其夜巡ヲ爲ス時ハ伍長及ヒ兵卒各一名ヲ具スルコトヲ得

第三十二條 本部長ハ憲兵大尉之ニ任シ次長ニ亞テ部事ヲ整理シ兼テ武器掛及ヒ書記ノ勤情ヲ監視ス

第三十三條 本部長若シハ次長ノ命ヲ受ケ各管區并ニ各屯所ヲ巡回スヘシ其夜巡ヲ爲ス時ハ伍長或ハ兵卒一名ヲ具スルコトヲ得

第三十四條 本部長ハ憲兵曹長之ニ任シ本部長ノ命ヲ受本部中ノ庶務ヲ掌ル

第三十五條 大隊長ハ憲兵少佐之ニ任シ部下ノ指揮ヲ司リ巡察ノ部署ヲ定メ其隊ノ事務ヲ總理シ會計ノ事務ヲ監視ス

第三十六條 大隊長ハ時々所轄各管區並ニ各屯所ヲ巡回シ部下ノ勤情ヲ監視ス其夜巡

ヲ爲ス時ハ伍長及ヒ兵卒各一名ヲ具スルコトヲ得

第三十七條 大隊長ハ各中隊長ノ報告ヲ受ケ一週毎ニ報告書ヲ作リ之ヲ隊長ニ申報スヘシ但非常若シハ至急ヲ照スル事件ハ急報又ハ日報ヲ以テ申報スヘシ

第三十八條 大隊副官ハ憲兵中尉之ニ任シ其隊中ノ庶務ヲ掌リ併テ武器掛及ヒ書記ノ勤情ヲ監視ス

第三十九條 大隊副官ハ大隊長ノ命ヲ受ケ各管區並ニ各屯所ヲ巡回スヘシ其夜巡ヲ爲ス時ハ兵卒一名ヲ具スルコトヲ得

第四十條 大隊下副官ハ憲兵曹長之ニ任シ大隊副官ノ命ヲ受ケ隊中ノ庶務ヲ掌ル

第三十八條ヲ第四十一條ニ改メ(分隊長ハ其分隊)ヲ(中隊長ハ憲兵大尉之ニ任シ其中隊)ニ改メ(巡察并ニ檢察ノ部署ヲ定メ)ノ十二字ヲ削除ス

第三十九條ヲ第四十二條ニ改メ(分隊長)ヲ(中隊長)ニ改メ之ヲ(大)ノ字ヲ加フ

第四十條ヲ第四十三條ニ改メ(分隊長)ヲ(中隊長)ニ改メ之ヲ(大)ノ字ヲ加フ

第四十一條ヲ第四十四條ニ改メ(分隊長)ヲ(中隊長)ニ改メ之ヲ(大)ノ字ヲ加フ

第四十二條ヲ第四十五條ニ改メ(中)少尉ハ分隊長(ヲ)小隊長ハ憲兵中少(尉)ノ内之ニ任メ(中隊長)ニ改ム

第四十三條ヲ第四十六條ニ改メ(中)少尉(ヲ)小隊長ニ改ム

第四十四條ヲ第四十七條ニ改メ(中)(少尉)ヲ(小隊長)ニ改メ(渾テ警察官ヲ引渡スヘシ)ヲ(親戚故舊ニ引渡スヘシ)若シ親戚故舊其地ニアラサル時ハ區役所若シハ戶長役場ニ引渡スヘシ)ニ改メ但シ書中(軍曹)ヲ(半隊長)ニ改ム

第四十五條ヲ第四十八條ニ改メ(中)少尉(ヲ)小隊長(ニ)分隊長(ヲ)中隊長(ニ)改ム

第四十六條 削除

第四十七條ヲ第四十九條ニ改メ(曹長ハ分隊長)ヲ(小隊副長ハ憲兵曹長之ニ任シ中隊長)ニ改ム

第四十八條ヲ第五十條ニ改メ(軍曹ハ中)少尉(ヲ)半隊長ハ憲兵軍曹之ニ任シ小隊長(

ニ受ケノ下)(中)少尉(ヲ)小隊長(ニ)ナリノ下)(中)少尉(ヲ)小隊長(ニ)改ム

第四十九條ヲ第五十一條ニ改メ(軍曹)ヲ(半隊長)ニ改メ巡察ノ下(及ヒ檢察)ノ四字ヲ

削リ(一伍)ヲ(分隊)ニ(伍長)ヲ(分隊長)ニ改ム

第五十條ヲ第五十二條ニ改メ(書記軍曹ハ下副官)ヲ(本部武器掛ハ憲兵曹長同書記ハ憲兵曹長軍曹ヲ以テ之ニ任シ大隊附武器掛ハ憲兵軍曹同書記ハ憲兵軍曹伍長ヲ以テ之ニ任シ各副官)ニ改ム

第五十一條ヲ第五十三條ニ改メ(伍長)ヲ(分隊長ハ憲兵伍長之ニ任シ)ニ改メ巡察ノ下(檢察)ノ二字ヲ削リ(一伍)ヲ(分隊)ニ改ム

第五十二條ヲ第五十四條ニ改メ(書記伍長ハ曹長)ヲ(中隊附ノ書記モ亦憲兵伍長之ニ任シ小隊副長)ニ改ム

第五十三條ヲ第五十五條ニ改ム

第五十四條 削除

東京憲兵定員表削除

○第五拾三號 十一月三十日 官省院廳府縣
自今大坂府下ニ憲兵ヲ設置候條此旨相違候事

但東京憲兵ノ内一中隊ヲ分派ス

○第五拾四號 十二月十三日 官省院廳府縣

月俸規則第十八條第十二條本條及旅費定則第七章第五項第十四章第二項左ノ通り正メ月俸規則

第十八條 一官吏職務上ノ事件ニ關シ訴訟ノ原告人又ハ証人引合人トナリ審判中ハ月俸全額ヲ給ス其自己ニ關スル訴訟ノ原告人又ハ証人引合人トナリ缺勤ヲ爲ス者或ハ事故アリテ出仕差止ル者ハ其月十五日前後ヲ區別シ減シテ五分ノ一ヲ給ス
第二十二條 一免職又ハ奉職中病死ノ者ニハ其節ノ月俸半額ヲ以テ一ケ年ノ賜金トナシ勤績年數ニ乘シテ之ヲ給スヘシ若シ罪ヲ犯シ官職ヲ失フ者及ヒ懲戒ニ由リ免職ノ者ハ之ヲ給セス 但書從前ノ通

旅費定則

第七章

第五項 官吏罪ヲ犯シ官職ヲ失フ者及ヒ懲戒ニ由リ免職ノ者ハ歸郷旅費ヲ給セス

第十四章

第二項 往時奉職中ノ公務ニ付訴訟ノ被告人又ハ証人引合人トナリテ出廷スルトキモ
第一項ニ準ズ但刑事被告人トナルモノハ此限ロアラス
右相違候事

○第五十五號 十二月十三日 警視廳府縣(東京府ヲ除ク)

明治十三年(四月)第貳拾五號達廢止候條同十五年(七月)第四拾壹號達ヲ實施セサル府縣ニ於テハ水火防禦ノ爲ニ死傷セシ巡査一同八年(一月)第三號達ニ照準處分スヘシ此旨相違候事

○第五拾六號 十二月十三日 官省院廳府縣

明治九年(六月)第六十四號達旅費定則第八章中神官旅費等級左ノ通改正候條明治十七年一月一日ヨリ施行可致此旨相違候事

官幣小社

別格官幣社

宮司

四等

國幣小社

○第五拾七號 十二月十三日 官省院廳府縣

明治十五年(九月)第五拾五號達中官幣小社別格官幣社國幣小社官司月俸在ノ通更正候條明治十七年一月一日ヨリ施行可致此旨相達候事

官司月俸

拾貳圓

○第五拾八號 十二月十五日 官省院廳府縣

海軍省中技術官名稱等級俸給別表ノ通改正候條此旨相達候事

海軍省技術官官等表

勅任	奏	任	判	任
三等	四等	五等	六等	七等
八等	九等	十等	十一等	十二等
十三等	十四等	十五等	十六等	十七等
技監	大匠	權大匠	少匠	權少匠
司	司	司	司	司
師	師	師	師	師
工長	工長	工長	工長	工長
一等	二等	三等	四等	五等
工長	工長	工長	工長	工長
一等	二等	三等	四等	五等
工長	工長	工長	工長	工長

海軍省技術官月俸表

技	監	大匠	司	權大匠	司	少匠	司	權少匠	司	匠	司	補
上等	四百五十圓	三百五十圓	貳百五十圓	貳百圓	百五十圓	百圓	八拾圓	圓	四拾圓	圓	圓	圓
中等	四百圓	三百圓	貳百三十圓	百七拾圓	百貳拾圓	六拾圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓
下等	三百五十圓	貳百五十圓	貳百圓	百五十圓	百圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓
師	一等師	二等師	三等師	四等師	五等師	一等工長	二等工長	三等工長	四等工長	五等工長	六等工長	七等工長
六拾	五拾圓	四拾五圓	四拾圓	三拾五圓	三拾圓	貳拾五圓	貳拾圓	拾五圓	拾圓	拾五圓	拾圓	拾二圓

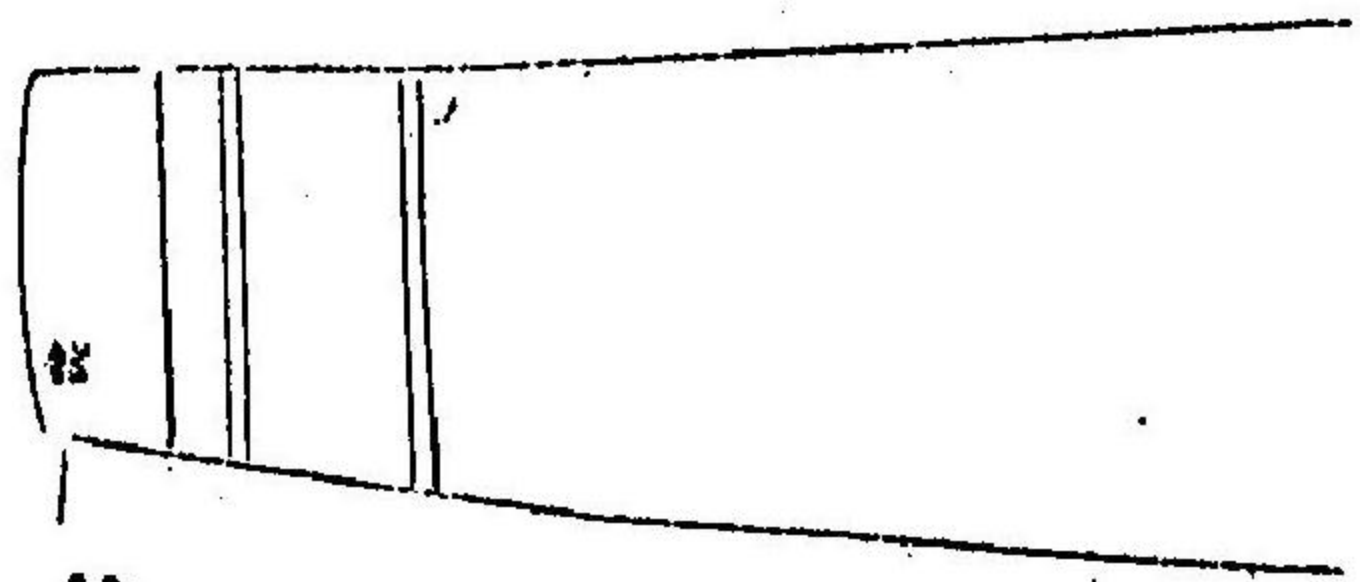
○技監以下五等師以上ヲ在職非職ノ二部ニ分ケ其在職ノ者ハ全月俸ヲ給シ非職ノ者ハ其半額ヲ給ス

○一等師以下工務ニ從事スル者ハ其勉否ト繁閑トヲ斟酌シテ既定ノ加俸ヲ給ス

○第五拾九號 十二月十五日 官省院廳府縣

郡長ニシテ奏任官ノ盟大禮服飾章左ノ通相定候條此旨相達候事

奏任郡長大禮服章



線五厘 飾章繻色等奏任
一般ノ例ニ從フ

○第六拾號 十二月十九日 府 縣

明治五年(十月)第三百拾貳號達但書中一定候迄ノ下(官船及ヒ)ノ四字ヲ追加候條此旨相達候事

○第六拾壹號 十二月十九日 官省院廳府縣

奏任府知事縣令ノ席次自今各官省院廳四等官ノ上席ト被定候條此旨相達候事

○第六拾貳號 十二月二十日 官省院廳府縣

監獄則第三十條ニ依リ監獄中ノ別房ニ留置シタル者及ヒ刑法附則第三十二條ニ依リ別房ニ留置シタル者若シ監内ノ諸則ヲ犯ストキハ監獄則第百七條ニ準擬處分スヘシ此旨相達候事

○第六拾三號 十二月廿一日 滋賀及沿海府縣

今般第四拾五號布告候ニ付テハ雇入雇止手数料ハ大藏省ニ納付可致尤右事務取扱ニ係ル費用ハ同省ヨリ別途交付候條明細仕譯書ヲ以テ同省ニ受取方可申出此旨相達候事
但本文收支金額ノ義ハ明細仕譯書ヲ以テ每三ヶ月分取纏メ翌月十日其地差立農商務省ニ届出ヘシ

○第六拾四號 十二月廿二日 官省院廳府縣

今般修史館中ニ副總裁ヲ置キ明治十四年十二月第百八號達職制中左ノ一項ヲ追加ス

副總裁 一員 職掌總裁ニ亞シ

右相違候事

○第六拾五號 十二月廿七日 官省院廳府縣

明治十年(六月)第四拾六號同年(七月)第五拾四號同十二年(十二月)第五拾六號通判事
檢事判事補檢事補年俸月俸左ノ通改正候條此旨相違候事

勅任	一等官	二俸	四千八百圓
	二等官	三俸	四千五百圓
奏任	三等官	四俸	三千五百圓
	四等官	五俸	三千圓
任	五等官	六俸	貳千五百圓
	六等官	七俸	貳千圓
判任	七等官	八俸	千九百圓
	八等官	九俸	千八百圓
判補	九等官	十俸	千七百圓
	十等官	十一俸	千六百圓
補任	十一等官	十二俸	千五百圓
	十二等官	十三俸	千四百圓
補補	十三等官	十四俸	千三百圓
	十四等官	十五俸	千二百圓

明治十六年 官令全書

○內務省甲號之部

○甲第二號 一月十七日

明治十五年(十二月)第五拾八號布告ニ據テ請願スル書面ハ美濃紙ヲ用ヒ正副貳通宛指出ス可者トス(但シ其書面ヲ却下スル場合ト雖副書ハ留置シヨリルヘシ此旨告示候事

○甲第八號 五月五日

當省所轄東京大坂橫濱ノ三司藥場自今左ノ通改稱

衛生局東京試驗所

同

大坂試驗所

同

橫濱試驗所

○甲第十五號 八月七日

今般清國廣東汕頭地方ヲ虎列刺病流行地ト認定候ニ付左ノ三港ニ於テ同地ヨリ來ル船舶ニ對シ十五年第卅一號布告船舶檢査規則實施爲致候條此旨告示候事

內務省甲號之部

長崎港

神奈縣下

橫濱港

兵庫縣下

神戶港

○甲第貳拾貳號 十月十九日

清國汕頭港ヨリ來ル船舶ニ對シ長崎神戸橫濱ノ三港ニ於テ十五年第三拾壹號布告船舶
検査規則實施爲致候旨去ル八月七日甲第十五號ヲ以テ及告示置候處汕頭虎列刺病殆
ト終熄候付該規則施行停止候條此旨告示候事

○甲第貳拾三號 十月廿九日

來十七年第一回醫術開業試驗舉行ノ地方及其期日左之通相定候條志願ノ者ハ本年第三
十四號布達ニ準據シ其願書ニ試驗ヲ受ケントスル望ノ場處ヲ記載シ本年十二月中居住
ノ地方廳ニ差出スヘシ此旨告示候事

三月上旬 東京府下東京

四月中旬 愛知縣下名古屋

四月中旬 宮城縣下仙臺

同 岡山縣下岡山

五月中旬 大坂府下大坂

同 愛媛縣下松山

同 青森縣下弘前

六月中旬 石川縣下金澤

同 長崎縣下長崎

○甲第貳拾六號 十二月十日

今般太政官第三拾四號ヲ以テ醫術開業試驗規則布達相成候ニ付右受験人心得左ノ通相
定候條此旨告示候事

受験人心得

第一條 醫術開業試験ハ當省ヨリ告示シタル試験舉行地ノ中各自便宜ノ地ニ於テ之ヲ
受ルルヲ得ヘシ

第二條 醫術開業試験ヲ受ケント欲スル者ハ本年第三拾四號布達醫術開業試験規則第
九條ニ準據シ其願書ヲ居住ノ地方廳ニ差出スヘシ

第三條 前條許可ノ指令ヲ受ケタル者ハ當省ヨリ告示シタル期限迄ニ試験舉行ノ地ニ
着シ宿所氏名ヲ其地方廳ニ届出ツヘシ

第四條 試験手数料ハ試験舉行ノ前日迄ニ醫術開業試験場ニ相納ムヘシ

第五條 試験場ノ取締上不都合ト認めヘキ所爲アル者ハ主事者ヨリ退場セシムルヲ

ルヘシ

第六條 前期試験ニ於テ二日後期試験及齒科試験ニ於テ三日以上缺席スル者ハ其期ノ試験ヲ終フルコトヲ得ス

願書式

醫術開業試験願

住所(寄留ナレハ本籍ヲ併記スヘシ)

族籍

氏名

年月生

私備何年何月何地ニ於テ醫術開業前期(後期)(齒科ナレハ醫術ノ上齒科ノ二字ヲ加ヘ前期後期ノ四字ヲ除ク)試験相受度別紙書類相添此段奉願候也

年月日

右氏名印

戶長氏名印

衛生委員氏名印

内務卿宛

明治十六年 官令全書

○内務省乙號之部

○乙第一號 一月廿六日 府縣

虎列刺病者有之候節ハ別紙書式ニ據リ逐一取調之上廿一ヶ月分取纏翌月十五日迄ニ當省衛生局ニ送致可致此旨相達候事

記載ノ解

問答ノ體ヲ上下ニ列示

シタルハ記載ニ便ナラ

シメタル者コソ其法ハ

例ヘハ第一項郡區町村

トアルニ某郡某村ニテ

發シシ者ナレハ區町ノ

二字ヲ塗抹シ又某區某

町ニテ發シシ者ナレハ

虎列刺病者取調書

(一) 郡區町村 番地

職 男 姓

業 女 名

年

(二)發病ハ何日何時頃ナルカ

月日午 前時 後時

(三)發病ノ場所ハ如何

區郡 村町

内務省乙號之部

〇百五十一

郡村ノ二字ヲ塗抹ス
カ加シ他ノ項目モ亦
コ傲フヘシ

- (一) 郡區町村番地ハ本籍寄留ニ拘ラス本人現住ノ地名ヲ記入シ又職業ハ各本人ノ現業ヲ明記シ例ヘハ農業主(農ニシテ自ラ勞役セサル者)ト自ラ耕作スル者トヲ區別シ又婦女老幼等コシテ職業ナキ者ハ戶上何職業ト記ス
- (二) 發病ハ醫師ノ診斷時日ニ拘ラス發病シタル時日ヲ記入スヘシ
- (三) 發病ノ場所ハ其發シタル郡區町村名

- (四) 休格ハ如何
- (五) 婚姻センヤ
- (六) 發病前ニ罹リタル病ハ無キヤ
- (七) 常ニ虎列刺病ヲ甚シク畏ル、姓ナレカ
- (八) 發病ノ誘因ハ如何
- (九) 前年其住家ニ同病患者アリシヤ
- (十) 前年家族中ニ同病患者アリシヤ
- (十一) 同病多キ地ニ行キシヤアリ
- (十二) 家内ニ同病患者アリヤ
- (十三) 近隣ニ同病患者アリヤ
- (十四) 同病患者又ハ其汚物等ニ觸接セシヤ
- (十五) 墓シ方ハ如何
- (十六) 住家及其向ハ如何
- (十七) 同數並現在人ノ數ハ如何
- (十八) 家屋ハ清潔ナリヤ
- (十九) 飲料水ハ如何
- (二十) 同一ノ飲料水ヲ用フル者ニシテ同病ニ罹リシ者ナキヤ
- (廿一) 便所ハ如何
- (廿二) 同一ノ便所ニ同病患者ノ行キシヤ無キヤ
- (廿三) 下水ハ如何
- (廿四) 近傍ノ潔否及燥濕ハ如何
- (廿五) 療養ノ場所ハ如何

(四) 休格ハ如何	強弱
(五) 婚姻センヤ	未既 有配偶 無配偶
(六) 發病前ニ罹リタル病ハ無キヤ	有無
(七) 常ニ虎列刺病ヲ甚シク畏ル、姓ナレカ	畏否
(八) 發病ノ誘因ハ如何	有無
(九) 前年其住家ニ同病患者アリシヤ	有無
(十) 前年家族中ニ同病患者アリシヤ	有無
(十一) 同病多キ地ニ行キシヤアリ	有無
(十二) 家内ニ同病患者アリヤ	有同時以前 有以後 無
(十三) 近隣ニ同病患者アリヤ	有同時以前 有以後 無
(十四) 同病患者又ハ其汚物等ニ觸接セシヤ	觸不觸
(十五) 墓シ方ハ如何	上中下
(十六) 住家及其向ハ如何	表一戸建 裏長屋 東西
(十七) 同數並現在人ノ數ハ如何	四間以上 三間以下 八
(十八) 家屋ハ清潔ナリヤ	清潔 不潔
(十九) 飲料水ハ如何	上水 河水 掘貫井 一家用 掘貫井 共用 水
(二十) 同一ノ飲料水ヲ用フル者ニシテ同病ニ罹リシ者ナキヤ	有無
(廿一) 便所ハ如何	一家用 總暨懸
(廿二) 同一ノ便所ニ同病患者ノ行キシヤ無キヤ	有無
(廿三) 下水ハ如何	通阻
(廿四) 近傍ノ潔否及燥濕ハ如何	清潔 不潔 燥濕
(廿五) 療養ノ場所ハ如何	自宅 病院

〇乙第貳號 二月三日 府縣(沖繩函館札幌根室ノ四縣ヲ除ク)

客年(七月)當省乙第四十一號達中左ノ通但書追加候條此旨相達候事

但准等外御用掛ヲ置候向ノ該費用ハ地方稅費目中醫察費ヲ以支辨スル儀ト心得ヘシ

○乙第三號 二月五日 府 縣

昨年第六十號ヲ以テ陸軍恩給又ハ扶助料ヲ受ケタル者氏名ヲ改メントキ取扱之儀公達相成候ニ付テハ恩給登錄寫帖裏面ヘ氏名等記載之節ハ四季金額記載ノ欄外左白ヘ左ノ書式ニ準シ可取計此旨相達候事

書式

氏 名

右明治年月日(本何)府縣(士族平民)何某方(ハ養子復籍)其他何々ニ據リ本(氏名)ニ改メシ旨届出ニ付茲ニ証記ス

年 月 日

(府縣)長官 名印

○乙第四號 二月六日 府 縣

刑事ニ付戸長ヲ經テ本人ヘ書類送達ノ節戸長役場費ヲ以テ使丁ヘ送達費操替相渡候儀

自今不相成候條此旨相達候事 (但從前ノ指令本文ニ抵觸ノ處ハ取消ス)

○乙第五號 二月九日 府 縣 (函館沖繩札幌根室四縣ヲ除)

客歲乙第七十二號ヲ以テ地方稅豫算議案并精算報告書式相達候處戸數制ニ於テ等級課額ヲ設クル時ハ該議案中ヘ記載スル儀ト心得可シ此旨更ニ相達候事

○乙第六號 二月十二日 警視廳府縣 (東京府沖繩函館札幌根室ノ四縣ヲ除)

明治十五年第四十一號公達ニ依リ給助例實施ノ府縣ハ十年十月當省乙第九十三號達警部巡查給與規則第十五條廢止候儀ト心得此旨相達候事

○乙第七號 二月十四日 府縣 (沖繩縣ヲ除)

別紙戊第壹號之通(神道副總裁神佛各管長)ヘ相達候條爲心得此旨相達候事

○戊第壹號 二月十四日 神道副總裁神佛各管長

教導職試補申付及試補ヨリ本職ヘ撰擧方可見合旨十二年戊第四號ヲ以テ相達置候處自今不及其儀尤試補申付ノ儀ハ人物精撰ヘ勿論徵兵服役ニ該ルヘキト否トノ條項ヲ詳記シ管轄廳照會ノ上寫相添當省ヘ伺出ヘシ此旨相達候事

○乙第八號 二月廿六日 宮内卿連名 府 縣

官國幣社祈年祭新嘗祭例祭之義ハ神社祭式之通地方長官又ハ次官參向可致等ニ付可成
的事務綜合セ參向可致尤遠隔ノ地等不得已支障有之代理參向ノ節ハ府縣官并郡區長
限リ候議ト可心得此旨相達候事

但府縣官及郡區長共支障ノ節ハ當日延祭爲致若シ三十日以上參向不做得節ハ幣帛料
等ヲ一社ニ付ニ官司等ヲ以執行爲致其事由兩省ハ詳細具狀スヘシ

○乙第九號 三月三日 大藏卿連名 府 縣

今般第七號布告ニ付テハ郡區長ニ屬スル滿年賜金其他ノ諸給與共渾テ國庫ヨリ支辨ノ
等ニ候條此旨相達候事

○乙第十號 三月十七日 警視廳府縣(東京府ヲ除ク)

客年三月當省乙第十九號達刑法附則第二十六條ニ據テ下付スル監視票裏面認印表別紙
之通改正候條此旨相達候事(但從前調製ノ分ハ當分取交セ相用ヒ苦シカラス

尋常監視票裏面雛形

認 印 表

一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月	七 月	八 月	九 月	初 年		二 年		三 年		四 年		五 年	
									十五 日以前	十六 日以後	十五 日以前	十六 日以後	十五 日以前	十六 日以後	十五 日以前	十六 日以後	十五 日以前	十六 日以後
									何日出頭	疾病ニ	旅行中							
									付不參									

旨相違候事

但本文適宜ノ方法ヲ取設ケタル節ハ當省へ届出ヘシ

○乙第十二號 三月廿三日 府縣

官用地ハ貸渡サ、ル制規ノ處木材運漕ニ際シ不測ノ天災ヲ被ラントスル掛念有之場合ニ當リ不得已人民ヨリ官材貯場ノ間地ヲ借用セント出願スルキハ其現場ノ都合ニヨリ一時應變ノ執計ヲ以テ相當ノ期限及ヒ料金ヲ定メ所用廳ヨリ貸渡シ可相成儀モ有之候條此旨可相心得但其料金ハ成規之通大藏省へ上納スヘシ

右相違候事

○乙第拾三號 四月二日 府縣(東京府ヲ)除ク

遺失物等公賣ニ係ル金額届方之義自今一週年度分取纏メ明細書相添ヘ毎年八月三十一日限リ届出ヘシ此旨相違候事

○乙第拾四號 四月六日 警視廳府縣(東京府ヲ)除ク

客年三月當省乙第十九號違監視票旅券書式中刑法附則第二十五條ニ依リ下付スヘキ旅

券被監視人姓名ノ上ヘ左ノ通追加候條此旨相違候事

刑名刑期

何年何月何日宣告

何年何月何日満期

監視何年何月

何年何月何日起

何年何月何日満

罪實犯數

○乙第拾五號 四月十三日 大藏卿連名府縣(函館沖繩札幌根室四縣)ヲ除ク

明治十三年(十一月)第五十號布告但書ニ依リ公儲金ヲ免除スルハ其罹災ノ年度ニ限ルニキ儀ト心得ヘシ此旨相違候事(但從前ノ合違之ニ矛盾スルモノハ廢止ス

○乙第拾六號 四月二十日 府縣東京府(函館縣札幌縣根室縣沖繩縣ヲ)除ク

明治七年(十二月)當省乙第八十四號違地籍離形別紙之通更正候條右ニ準據編製可致此旨相違候事

何府地籍

○國郡區地籍倣之但町村地籍ノ編体ハ各府縣ノ便宜タル可シ
 ○府縣地籍ニハ國郡區町村ノ數國地籍ニハ郡區町村ノ數郡區地籍ニハ町村ノ數ヲ其表紙ノ裏面ニ記載ス可シ

○地籍編製ノ年月日モ亦之ヲ表紙ノ裏面ニ記載ス可シ

○表中朱横線ノ上ヲ以テ筆數ハ千位段別ハ町位トス可シ

○用紙ハ美濃紙トス若シ他紙ヲ用サルモ美濃紙ノ寸法ヲ準トス可シ且ツ袋綴ロシテ綴目ニ主任捺印スヘシ

此線朱書

此線朱書

地種	官			目筆	數方	積
	皇宮地	離宮地	皇宮地附屬地			
御陵地						
御墓						
計						

種	第一種地								御陵地	御墓	計
	社										
	小社地	村社地	郷社地	府縣社地	國幣社地	別格官幣社地	官幣社地	宗廟地			
計											

官 有 地										
小計	皇族賜邸地	官 用 地								
		計	太政官用地	外務省用地	內務省用地	大藏省用地	陸軍省用地	海軍省用地	文部省用地	農商務省用地

第 二 種										
小計	金山	銀山	銅山	地						
				計	府縣應用地	警視廳用地	會計検査院用地	元老院用地	大審院用地	宮內省用地

第

道	附	物	物	物	波	河							
路	寄	干	置	揚	止	岸	河	湖	澤	沼	池		
	洲	場	場	場	場	地							

城	電	燈	浮	露	倉	荒	原	牧	揭	堤	並
寨	信	明	標	笛	庫	蕪			示		木
	架	臺	室	室	敷	地	野	場	場	塘	敷
	線	敷	敷	敷	地						
	柱	地	地	地							
	敷										
	地										

田	合計	第四種							地敷	
		小計	女紅場敷地	授露場敷地	救育所敷地	病院敷地	寺院敷地	計	小敷院敷地	

有						民					
山	柴草山	雜木山	土砂并止山	水源涵養山	用材山	計	鹽濱	鹽田	宅地	畦畔	畑

官令全書

內務省乙號之部

